

伝書鳩

第9号



井上靖記念文化財団



無題(詩) 井上靖……………	4
思いつくままに 三木啓史……………	6
鳩のおしらせ①……………	9
井上靖先生の中国への旅 佐藤純子……………	10
「高原の薫風のなかの井上靖展」報告 大藤敏行……………	30
しろばんばの里・天城湯ヶ島 宇田治良……………	34
井上靖文化賞・要項……………	47
第十五回井上靖文化賞 嶋田しづ氏に……………	48
微笑のひと 永瀬嘉平……………	54
井上靖先生のこと 老呉服商の憶い出 池田泰治郎……………	62
父の休息 家族の撮った写真から ② 井上卓也……………	70
鳩のおしらせ②……………	73
私の備忘録より 浦城いくよ……………	74
井上靖文化賞歴代受賞者……………	85
平成十九年度 事業報告 井上修一……………	86
井上靖文化賞に関するお知らせ……………	91
図書だより……………	92
鳩のカット 福井欧夏	
花のカット 黒田佳子	
奥付のカット 岩永 泉	

無題

井上靖

母よ。俯むいて編物しているあなたの横顔が余り若く美しいので、私はついあなたを足の悪い少女と間違えてしまう。そして、不幸だけが此世で美しいなどと言って、あなたの穏やかな夢に怖ろしい輝^{ひび}を入れてしまうのだ。

足の悪い少女よ。落葉の音を聞き入っているあなたの瞳が余り冷たく静かなので、私はついあなたを母と間違えてしまう。そして幸福とは斯うした一時を言うのでしょうか。と言ってあなたの澄んだ諦念を汚く濁してしまうのだ。

（「拾遺詩篇」より）

同じ年生まれというだけで、心を許すということがあるのでしょうか。私の父、三木武夫は明治四十年生まれ、井上靖先生と同じ年でした。その未成年生まれというご縁のおかげで、何かと親しくさせて頂きました。

四十年ほど前になりますが、昭和四十四年の夏、父の故郷徳島の「阿波踊り」にお誘いしたことがありました。私はまだ学生でしたが、荷物持ちということで随行しました。暑さの真っ盛り、傍観者も巻き込む大騒ぎを、結構楽しそうに見ておられました。時々声を掛けて頂きましたが、どんな話をしたのか、記憶も定かではありません。

それから随分経って、私の結婚式の媒酌をお願いに伺いました。文壇の大御所に向かって、身の程知らず

の不躰なお願いでした。「今まで仲人は三回しか引き受けたことがないし、そのうち一組は離婚してしまっただし」と、実にやんわりとお断りになられているのに、若くて思慮の足りなかった私は「一向に構いません。それに私達は絶対に離婚しません」などと申し上げて、強引に引き受けて頂きました。

その時、傍らにおられたふみ夫人の方を優しく見ながら「昨晩は家内とね、この居間にある花器の一つ一つ名前を付けてみようということになってね、この器は「ベルシャの青」にしようと言うと、家内がいやそれは、「カスピ海の青」でしようとか、二人であれこれ言っている内に、夜が更けてしまった」と、可笑しそうに話していただきました。私には、生活に直接関

わらない「もの」について語り合うということ自体が何か信じられないことに思えて、驚きました。

結婚しても共通の話題を持つ仲良い夫婦であれという「はなむけ」の言葉であったと気がついたのは、大分経ってからのことでした。

お正月などに井上先生のお宅に伺うと、大きな居間で大抵何人かの先客がおられて、熱心にお話をされています。話題は、お書きになっておられる小説のことから、日本の美術工芸の話、中国の歴史、西域の旅の話と、実に多岐にわたります。

時たま私の様なチンピラにも、「あなたは どう思いますか？」と真面目な顔で尋ねられます。そのたびに見当はずれの受け答えしか出来ず、ただただ赤面するばかりです。偉大な作家でありながら、少しも偉ぶったところがない、それがとても不思議でした。

ある時、井上先生が、毎日新聞の学芸部で駆け出しの記者をしてもらった頃のことを話してくださいました。京都の五条坂にある陶芸家、河井寛次郎氏の工房を尋ねて行かれた時のことです。河井寛次郎氏は井上

先生より二十歳年上で、濱田庄司氏らとも親交があり、独自の作風で既に高い評価を受けていた芸術家でした。井上先生が恐る恐る挨拶をすると、快く招き入れてくれて、色々話を聞かせてくれたそうです。そして、自分の作品や作陶技術について語りながら、時折若い井上記者に「君はどう思う？」と尋ねられたそうです。

井上家の居間には、河井寛次郎氏作の壺が真正面に飾ってあります。

昭和六十三年の五月に北京で、私の父と母の拙い書道、絵画と陶芸の作品展が開催されることになりました。その時偶然にも、井上先生が北京に滞在して居られ、作品展にも立ち寄って頂きました。帰りの飛行機も御一緒でした。

人民大会堂のレセプションで、徳島から駆けつけてくれた阿波踊りの連が余興に踊りを披露していると、誰からとなく立ち上がり、最後には殆ど全員が「同じ阿呆なら踊らにゃソンソン」と踊りに参加してくれた話をしましたら「そりゃ良かった、愉快ですね。日中友好の阿波踊りでしたね」と仰有って喜んでくださっ

たのが印象に残っています。井上先生の席の周りには大勢が集まり、空の上の談笑サロンのようでした。この時が井上先生最後の海外旅行となりました。

平成三年一月二十九日の夜、井上先生がご逝去されたとの知らせを受けて、世田谷区桜のお宅に駆けつけました。御遺体に戻られた直後で、報道陣の車がたくさん家の周りを囲んでいました。とても暗くて寒い晩でした。家の中にはご家族が集まっておられました。誰もが憔悴された表情でした。

ふと気がつくと、ふみ夫人がまだ外にいて、記者達に囲まれて応対しておられました。ウールのショールを肩に掛けたお姿が、いつもより小さく寂しそうに見えました。

ご長男の修一さんに耳打ちして「新聞記者連中は本当に図々しいのだから、いい加減にして貰ったらどうですか。お母上が可哀想じゃないですか」と申しました。修一さんは、ふみ夫人をちらっと見やつてから「もうこの辺でお引き取り願いたい」と割って入りましたが、なかなか記者達も引き下がりません。

しばらくしてから、家の中に戻ってこられたふみ夫人は、静かに修一さんに向かって「新聞記者の人も仕事で来ているのです。出来る限りお答えするのは当たり前です」と仰っていました。私はとても恥ずかしく思いました。

人生に師と仰ぐべき人は大勢います。それでも、あの様に優しく、しかし痛烈に自分の至らなさを教えて下さったのは、井上靖先生とふみ夫人をおいて他にないのです。井上先生ご夫妻の御薫陶を得たことは、私の生涯の掛け替えのない幸運であり、誇りであります。

鳩のおしらせ①

◎ 翌檜忌 井上靖追悼事業

井上靖感想文発表・表彰式

映画「あすなる物語」上映会

平成二十一年一月二十四日(土) 天城温泉会館

十時～十時五十分 募参(天城温泉会館↓熊野山墓地)

十一時～十二時 井上靖感想文コンクール発表・表彰

十二時～十三時 昼食・休憩

十三時～十五時 映画「あすなる物語」上映会

※上映会は会費制(五〇〇円、小学生以下は無料)

主催 伊豆市教育委員会、井上靖ふるさと会

共催 井上靖文学館

後援 伊豆市、静岡新聞社・静岡放送、伊豆日日新聞、井上靖記念文化財団

問合せ・映画チケット取り扱い

伊豆市教育委員会生涯学習課

☎〇五五八―八三一五四七六

映画「あすなる物語」(一九五五年、東宝)

原作・井上靖、脚本・黒澤明、監督・堀川弘道、製作・田中友幸

出演者

鮎太(第一話)・久保賢、鮎太(第二話)・鹿島信哉、鮎太(第三話)・久保明、冴子・岡田茉莉子ほか

一人の少年(鮎太)が、複雑な人間関係の中で次第に成長していく様子を、檜のきに似ているが檜とは違い、明日は檜あすなろになろうと一所懸命になっている。この物語は、井上靖の自伝的小説を映画化するにあたり、原作にある小学生と中学生時代のエピソードをそのままに、新たに高校時代が加えられ、三話によるオムニバス構成になっています。

またこの映画は、長年黒澤明監督の助監督をつとめた堀川弘道の監督昇進を記念して、黒澤自身が脚色した貴重な作品でもあります。

この映画会は、平成二十年度文化庁優秀映画鑑賞推進事業です。

井上靖先生の中国への旅

佐藤純子（日本中国文化交流協会代表理事）

井上靖先生は、戦後二十七回にわたって中国を訪ねておられる。一九五七年から一九八八年まで、五十歳から八十一歳までの三十一年間である。二十七回その時々を訪中時期、代表团名、同行者、訪問地を記し、当時を思いおこしてみたい。

①一九五七年十月二十六日～十一月十九日

日本文学者代表团。山本健吉、多田裕計、十返肇、中野重治、堀田善衛、本多秋五、木村菊男、小畑真一。北京、上海、杭州、武漢、蘇州、広州。

中国は、長期にわたる半植民地従属国から、抗日戦争・解放戦争の勝利を経て建国八年目、国家としての

骨格を作り上げている時期であり、日本は戦後十二年、石橋首相の病氣退陣により岸内閣が成立、鳩山内閣以来好転していた日中関係に、暗い影がおとされた年である。

日中間に国交はなく、日本政府が国として認めていない中国への渡航は許されず、行先国が香港（当時はまだ、英国から中国に復帰していない）の旅券を持って、旅券法違反を覚悟して中国に入るのである。

そのような危険を冒してまで何故中国に行こうとする人達がいたのか。帰国後、まさか逮捕はされまいという度胸、それ以上に、日本文化の母国ともいえる中国文化への憧れと尊敬、文化の交流をもって中国との国交を促すという理想と信念をもつての行動である。

そのような人々は決して多くはなかったが、しかし、いわゆる進歩的文化人にとどまらず、文化各界の影響のある人々が、意外な強さと確かさで道を切り開いていたのである。そのお一人が井上先生である。

先生は一九五〇年の芥川賞受賞直後に、西域に題材をとった「漆胡樽」を発表、五一年に「玉碗記」、五三年に「異域の人」、五七年三月から八月まで『中央公論』に「天平の甕」を連載しておられる。

初訪中の井上先生は北京では老舎、田漢、周揚、上海では巴金、杜宣などの自宅を訪問し親交を結んでおられる。また、「天平の甕」の発表は中国に大きな波紋を投げかけた。鑑真という人が中国ではほとんど知られていなかったのである。著名な詩人でもある趙樸初師は「鑑真和上に光をあてたのは中国人ではなく井上先生です。私達は井上先生に感謝しなければなりません」と後年まで言っておられた。この年、楼適夷氏による中国語訳の出版が準備された。中国作家出版社による出版は一九六三年四月であるが、今では「鑑真号」として日中間の定期航路の船名にまでなった、文



中国訪問に旅立つ日本文学者代表团。左より小畑真一氏、井上先生、十返肇氏、山本健吉氏（1957年10月26日）

化交流の大先達としての鑑真和上の名が、日中双方の人々に浮かび上ったのである。

私はこの年の二月、三月の卒業を前にして、創立翌年の日本中国文化交流協会に勤務した。二十二歳であった。五月頃、上司の言いついで、協会機関紙に掲載させていただく井上先生のお原稿をいただきに上った。たしか銀座東急ホテルだったと思うが、活字でしか知らぬ著名な作家にお会いする興奮は尋常なものではなかった。和服の袖をまくり上げ、鬼気迫るお姿で書いておられた先生からいただいたお原稿「遣唐船のこ」とは『日中文化交流』一九五七年七月号を飾っている。次にお会いしたのは、中国への御出発を羽田空港にお見送りした時である。二回とも、私のような若い事務局員にまで丁寧に接して下さる、どこか慇懃で近寄りやすい印象であった。

この年の十二月、先生御一家は大井町から世田谷に転居しておられる。今でもよく皆様の話題にのぼる大井町のお家を私は知らない。



親しかった作家の老舎氏（左）と。北京にて（1961年7月）

②一九六一年六月二十八日～七月十五日

日本作家代表团。亀井勝一郎、平野謙、有吉佐和子、白土吾夫。北京、上海、広州。

一九五八年五月に起きた「長崎国旗事件」（長崎で開催中の中国切手展の会場に掲げられた中国国旗を引きずり降ろした日本の暴漢を、当局がろくに調べもせず釈放した）を契機に、貿易が途絶、文化交流も重大な影響を受けていた日中関係に、六〇年安保闘争の結果、岸内閣が退陣、池田内閣の誕生により、明るい兆しが見えてきた。

中国では、中ソ論争が本格化しつつも、中国が五〇年代から掲げていた第三世界との連帯を打し進め、アジア・アフリカ作家会議の東京での開催を提唱した。三月に開かれた会議に、中国は巴金、謝冰心らを中心とした大型代表団を派遣し、日本文壇はこぞって大歓迎した。

井上先生は巴金と謝冰心を御自宅に招き、奥様のお料理で温かくもてなされた。両氏の案内役で私は初め

て井上家に伺ったが、居間に続く一段高くなっている日本間で、窓に舞う春の雪を眺めながらの語りあいにお相伴できた幸せを、今も忘れない。

先生は一九五八年に「楼蘭」、五九年に「敦煌」「洪水」「蒼き狼」を、六一年に「狼災記」を発表、数々の受賞に輝いた。

訪中の際、一行と会見した周恩来総理が、人民大会堂の会見室に掲げられていた毛沢東主席の詩「沁園春・雪」の中に出てくる成吉思汗（チンギス・カン）の文字を指さし、「蒼き狼」、私も読みたいものです」とおっしゃったという。二十世紀を代表する政治家周恩来。「あのような宰相をもった中国人は幸せですね。私は周恩来の居る中国を信じますね」と井上先生は、よく言っておられた。

③一九六三年九月二十七日～十月二十五日

鑑真和上円寂千二百年記念日本文化界代表团。安藤更生、宮川寅雄、佐木秋夫、長沢元夫、長島健。北京、南京、揚州、杭州、広州。

一九六二年に始まった「L・T貿易」により経済交流が活発化、六三年には中国に日本との交流を専門に行う中日友好協会が成立、文化交流も一段と発展した。この年が鑑真の円寂千二百年にあたるため、その記念行事が日中双方で盛大に行われた。「天平の甍」の翻訳出版により中国にも多くの読者を持つに至った井上先生は、中国仏教協会に贈呈する、本郷新氏制作の鑑真和上像を携えて訪中したのである。「天平の甍」発表の六年後に初めて揚州の土を踏んだことになる。

この年先生は、「楊貴妃伝」を『婦人公論』に連載、六月には「宦者中行説」を発表。

ケネディ大統領暗殺もこの年である。

④一九七四年九月二十九日～十月十日

日本中国文化交流協会代表团。中島健蔵、中島京子、宮川寅雄、白土吾夫、島野武、武蔵川喜偉、有吉佐和子、安田順恵、佐藤純子。北京、南京、揚州、上海。

羽田から四時間の北京。過去三回は香港経由で三日がかりの北京であった。機中の一行は「近さ」をかみしめていた。

これ以後、先生はほとんど毎年、二十三回の訪中を重ねることになる。私が井上先生のお供をしたのは、この訪中が初めてである。

九月三十日、一行は国慶節前夜祭の国宴に招かれた。周恩来総理が公の場に姿を見せたのは、この時が最後である。

⑤一九七五年五月八日～二十七日

日本作家代表团。井上ふみ、戸川幸夫、庄野潤三、水上勉、司馬遼太郎、小田切進、福田宏年、白土吾夫、佐藤純子。北京、洛陽、西安、延安、無錫、上海。

国交正常化三年目とはいえ、文革中の中国では会いたい作家に会えないばかりか、消息を尋ねることさえ憚られる状況であった。一日のスケジュールが終る

井上先生十一年振りの訪中である。一九六六年に始まった文化大革命は、武闘こそおさまっていたがまだ終息してはいない。一方、日中間の政治状況は紆余曲折を経ながら飛躍的に進展した。一九七二年九月二十九日、日中国交正常化が実現したのである。七一年四月のピンポン外交、七月キッシンジャーの電撃的訪中、十月中国の国連復帰、七二年二月のニクソン訪中、七月長期政権佐藤内閣が退陣し田中内閣誕生。世界政治の大きなうねりの中で成った、日中間の戦争状態の終結であった。

二年後の九月二十九日、日中間に定期航空路が開設、その一番機に招待されての訪中であつた。しかし井上先生には訪中を躊躇されることがあつた。一九七〇年に短編「壺」を発表しておられたことである。「壺」は、文革の迫害に死をもつて抗した老舎への愛惜とその人格を称えた作品である。老舎が全面的に否定されている中国への旅、「その時はその時」と言う中島、白土両氏の言葉もあつての訪中であつた。

と、一同、毎夜、必ず井上団長の部屋に集り、グラスを片手に談論風発、最後はいつも歌になった。「ねりかんブルース」のメロディーに白土さん作詞の替歌で私が前座をつとめると、水上先生が「黄塵すさぶ延安の、棗の下^{なつめ}のあの子等よ、俺も若狭の荒屋で、泣いた裸足がなつかしい」とせつせつたる水上節。司馬先生は「我はますらお日の本の、国のすさびを憂いつつ、渡ればはるか江南の、稲穂の影に帆の浮かぶ」と高音で歌った。井上先生の歌は炭坑節の曲で「月が出た出た月が出た、北京飯店の上に出た、七五年の月が出た、日本と中国の月が出た」と呟くような調子であつた。「私達は、この時の中国、今の中国をよく見ておきましようね」と井上先生はおっしゃったが、含蓄のある言葉だと今も思う。

ふみ夫人は初めての訪中であつた。

⑥一九七六年十一月二十九日～十二月十五日

日本作家代表团。井上ふみ、巖谷大四、伊藤桂一、清岡卓行、辻邦生、大岡信、秦恒平、白土吾夫、



古来有名なイリ馬に騎乗した井上先生と東山魁夷氏（右）。新疆ウイグル自治区イリ地区・セリム湖畔にて（1977年8月18日）



紹興のホテルにて、ふみ夫人（右）と（1976年12月10日）

佐藤純子。北京、大同、杭州、紹興、蘇州、上海。

この年中国は一月に周恩来、七月に朱徳、九月に毛沢東を相次いで失い、七月には死者二十四万人といわれる唐山大地震、十月には「四人組」逮捕と、まさに激動の年であった。

初冬の北京で、井上先生は文革の迫害から復活した年来の友人、周揚、劉白羽、謝冰心の各氏らと十数年振りの再会をはたし、国家の指導者となったばかりの周恩来夫人鄧穎超女史ともお会いした。「でも、老舎がいまねえ」、井上先生の悲しそうな顔が忘れられない。

魯迅の故郷、紹興を訪ねた時のこと、一行の車列が町の真中で立往生した。険悪な眼をした群衆に囲まれたのである。案内役の唐家璇氏は「皆さん、車から出ないで下さい」と緊張の面持ち、私は最後尾の車に居て、どうなるのかと思っていたとその時、先頭車の井上先生が、和服姿のふみ夫人の手をとって下車され、群衆に向って笑顔を向けられたのである。やがて広場

は大きな拍手に包まれた。お二方は大した度胸の持ち主でもあられる。

⑦一九七七年八月十二日～九月一日

日本中国文化交流協会代表团。中島健蔵、中島京子、宮川寅雄、東山魁夷、藤堂明保、司馬遼太郎、團伊玖磨、白土吾夫、横川健、佐藤純子。北京、ウルムチ、トルファン、イリ、ホータン、上海。

井上先生は一九六五年にソ連領の西域を訪問され、「西域の旅」「西域物語」などを著しておられるが、中国領西域は初めてであった。セリム湖畔では馬にまたがり、農家のぶどう棚の下では踊りの輪にお入りになる、しかし、砂漠に足をふみ入れる時の先生の後ろ姿には人を寄せつけぬものがあった。「タクラマカンの砂を手にとり拝がみて 若き日の夢 果し終りぬ」ホータン郊外のダンダンウイリク遺跡に入られた時の歌である。

東京への帰路上海に立ち寄った。復活した巴金に会

うためである。北京からの飛行機が着陸した機側に、巴金先生が立っておられた。十四年振りの感動的な再会。その夜歓迎会の席上、井上先生は「壺」が収められている『桃李記』を贈られた。二日後、帰国を見送りに来られた巴金先生と握手を交しておられた井上先生が私を呼び「巴金先生が「壺」を読んで下さったそうです」と興奮気味におっしゃった。この時の井上先生の表情を、巴金先生は「探索集」に書いておられる。この年、中国は十一全大会で文革の終結を宣言する。私達は、その放送をウルムチの迎賓館で聞いた。

⑧一九七八年五月二日～十九日

井上靖一行。井上ふみ、横川健。北京、蘭州、酒泉、嘉峪関、安西、敦煌、陽関、玉門関。

「敦煌」発表後二十一年を経ての敦煌初訪問。私は敦煌からお帰りになった北京でお会いしたが「私の書いた『敦煌』は間違っていないませんでした」「敦煌の人間が、私の七十一歳の誕生日を祝ってくれました」と

夜を徹してお話し下さった。
この年の八月、国交正常化から六年を経て日中平和友好条約が締結。文革によって壊滅状態だった中国の作家、演劇、音楽、美術等の各協会が十二年振りによりやく再建された。

⑨一九七八年五月十九日～六月七日

日本作家代表团。水上勉、阪田寛夫、城山三郎、奥野健男、尾崎秀樹、三好徹、山田智彦、白土吾夫、佐藤純子。北京、南京、揚州、蘇州、上海。

敦煌への十七日間の旅のあと、先生は奥様を北京から帰国させ、引きつづき右代表団の団長を務められた。毎夜、敦煌学のゼミナールであった。水上先生などは「耳学問は学問の原点だね」と御満悦であった。三回目を訪ねた揚州が、鑑真和尚を顕彰する町として盛んになっていたことも、先生を大いに喜ばせた。

鄧小平副総理の提唱により、中国の改革開放路線への大転換が決定されたのはこの年である。

⑩一九七九年七月二十四日～三十日

映画「天平の甍」撮影班を激励。東宝の関係者と。上海、蘇州、揚州。

鑑真を演じた田村高廣氏は「白いスポーツシャツをお召しになった井上先生が、蘇州郊外の険しい岩山天平山で撮影している私達を見舞って下さった。夜は一献かたむけながら真向法まっこうほうの御指南を受けた。生涯忘れ得ぬ思い出である」と、井上先生御逝去の際に追悼文を寄せている。その田村氏も今は居ない。

⑪一九七九年八月六日～二十七日

井上靖一行。宮川寅雄、圓城寺次郎、樋口隆康、横川健、佐藤純子。北京、ウルムチ、トルファン、カシュガル、アトシ、インギシヤ、ヤルカンド、アクス、アラル、クチャ。

この年六月に、日本中国文化交流協会中島健蔵会長

が逝去、井上先生は葬儀委員長を務められた。

この旅は、香妃の故郷カシュガルとタリム河を見たという気楽な旅のつもりだった。ところが、宮川先生がインギシヤで高熱を発し、続いて井上先生がカシュガルで四十度の熱に見舞われるというハプニング。タクシーで行きを中止して、それぞれのお部屋が病室となり懸命の治療が施された。宮川先生の熱は間もなく下ったが、井上先生はうわごとをおっしゃるほどの様子。私は医師団が集っている部屋にゆき「生命の危険はありますか」と聞いた。皆様、「ありません」というものの、そのうちに一番若い横川さんの様子がおかしくなった。次は私かと途方にくれた。三日目の朝、井上先生の熱は下がり始めた。驚くほどの回復力でそれから五日後にはアクスに移動し、タリム河を見るために、アラルという村に片道六時間をかけての日帰りを敢行。タリム河に舟を浮かべたのは、わずか一時間であった。

過酷な旅から北京に戻り、東京に帰る同行者を見送って、井上先生は北京からパキスタンに行かれたので



中国最大の内陸河川タリム河にて。著書『河岸に立ちて』『シルクロード詩集』にも、タリム河の作品が収められている（1979年8月19日）

ある。何ものに憑かれているような激しさ、というのだろうか。

⑫一九七九年十月四日～二十日

NHKシルクロード取材班特別ゲスト。NHK取材班と。北京、蘭州、武威、張掖、山丹、酒泉、敦煌。

喜多郎のテーマ音楽とともに大反響をよんだテレビ番組「シルクロード」。茶の帽子にグレーのダウンジャケットの井上先生が、しっかりとした足どりで、秋も深い敦煌の莫高窟を解説するお姿がなつかしい。日本中に敦煌ブームが広がった。

⑬一九七九年十一月二十四日～三十日

映画「天平の甕」撮影班を激励。東宝の関係者と。北京、広州、桂林。

熊井啓監督は井上先生を桂林に迎えて「海外ロケに

二度も来て下さる原作者はいない」と大感激。映画は初の中国ロケ作品として翌年公開、大きな成功をおさめた。後に「本覚坊遺文」も撮られた熊井監督も昨年急逝された。

井上先生はこの年、七月から十一月までの間にパキスタンと中国に四回、旅を重ねられたことになる。

⑭一九八〇年四月三十日～六月一日

NHKシルクロード取材班特別ゲスト。NHK取材班と。北京、ウルムチ、ホータン、ケリヤ、ニヤ、チェルチェン、チャリクリク、ミールン。

ニヤ、ミールンでは砂にとじこめられたり、通信が途絶えたり容易ならぬ旅だったそうだが、そういう時、一番泰然自若としておられたのは井上先生だった、とNHKの田川純三さんからよく聞かされた。その田川さんも鬼籍に入られた。

⑮一九八〇年八月四日～十六日

井上靖一行。井上ふみ、中島京子、浦城朋子、白土吾夫、佐藤純子。北京、フホホト、パオトウ、上海。

日本中国文化交流協会の創立以来二十三年間会長を務められた中島健蔵氏のあとを受けて、井上先生はこの六月会長に就任。

中島夫人をお誘いし、ふみ夫人とお孫さんの朋子さんを伴っての旅。北京で要路の人々にお会いになった後、内蒙古に遊んだ。パオトウ近郊のチリメ砂漠の丘をすべり降り、喚声をあげる朋子さんを優しく見守っておられた。「夫と孫と 友ら誘いて古希の年 蒙古黄河の鉄舟橋を渡る」。その旅で詠まれたふみ夫人の歌である。

⑯一九八一年九月二十三日～二十九日

日本中国文化交流協会代表団。井上ふみ、岩波雄二郎、宮本研、北村和夫、堤清二、白土吾夫、横川健、佐藤純子。北京、曲阜、上海。

北京で魯迅の生誕百年を記念する大きな会に出席した後、孔子の故郷曲阜を訪問。「孔子」の最初の取材と言われているが、同行者にそんなことは全く感じさせなかった。

九月二十八日は、ふみ夫人の七十一歳の誕生日。しかも孔子の生れた日と同じということで、曲阜では盛大なお祝いの宴が開かれた。デザートにおめでたい桃のお饅頭が出たところで、井上先生が「君、お札に歌を歌いなさい」。ロングドレスのふみ夫人は、すつくと立ち上り、女学生のように「琵琶湖周航歌」をお歌いになった。宴会の主人、著名な作家劉知俠氏は、ためらわずに、ふみ夫人を抱きしめた。続いて北村和夫氏が「おお、ロクサーヌ姫よ……」とシラノ・ド・ベルジュラックの台詞を朗々と語りながら、ふみ夫人を抱き上げたのである。一同あつけにとられながら、宴は割れんばかりの拍手につつまれた。

北村氏は昨年亡くなられたが、お会いするたびに「わが恋人、おふみのかたは、お元気？」といつも言

っておられた。そのことは、ふみ夫人の御自慢であつた。

⑰一九八二年九月二十七日～二十九日

日中国交正常化十周年祝賀代表团。白土吾夫、横川健。北京。

日中友好団体代表の総団長として訪中。国と国との友好は、人と人との心のふれあいが原点であり、そのためにこそ文化交流は大切なのであることを説いた井上先生の人民大会堂での演説は、多くの人達に深い感銘を与えた。二年前、大平首相の急逝により、その後を受けた鈴木首相も、先生のお話に深く傾いておられた。

⑱一九八二年十一月二十二日～十二月三日

日本中国文化交流協会代表团。井上ふみ、緑川亨、清岡卓行、武満徹、大越幸夫、白土吾夫、佐藤純子。上海、北京、済南、淄博、鄭州、淮陽、商丘。

上海の巴金先生にお会いする日程調整に苦労し、いつもの北京入境ではなく、成田からまず上海に向かった。前年に日本ペンクラブの会長に就任しておられた先生は、八四年に東京で開かれる世界ペン大会への出席を巴金先生に要請した。「生きてさえいれば、必ず出席します」との言葉に感激しておられた。

井上先生は鄭州で一行と別れ、ふみ夫人、白土さんと私を伴って、孔子ゆかりの淮陽と商丘を訪ねた。

鄭州で、井上先生と武満氏は、孔子と音楽について、熱く語っておられた。済南での宴席で、ふみ夫人の独唱に誘われて、武満氏が「上を向いて歩こう」を軽やかに歌った姿も忘れられない。

⑲一九八二年十二月二十九日～八三年一月六日

井上靖一行。井上ふみ、井上卓也、浦城義明、白土吾夫、白土英子、佐藤純子。北京、上海。

北京でお正月を迎えたいと家族と白土夫妻を誘って

の旅。廖承志先生、夏衍先生などのお家に招かれ、親しい友人と「新年好」と握手を交わす楽しい毎日であった。特に王炳南先生のお宅での年越しの宴はすばらしかった。十二時とともに電気が蠟燭に変わり、はなやかな音楽が流れた。

王炳南氏は、長年、周総理の片腕として中国外交を担い、五〇年代から始まったワルシャワにおける中米大使級秘密会談の立役者である。井上先生は「中国の政治家はスマートですね」とよく言っておられた。

⑳一九八三年六月三日～七日

『人民中国』創刊三十周年記念祝賀会参加。白土吾夫、横川健。北京。

建国四年目に発刊された日本語の中国紹介誌『人民中国』は、現在も刊行されているが、最近の経済発展優先の編集内容を見ると、時代の変遷と激動の歴史をつくづくと感じさせられる。

②① 一九八三年六月二十四日～二十六日

廖承志氏葬儀に参列。中島京子、宮川寅雄、千田是也、圓城寺次郎、杉村春子、有吉佐和子、白土吾夫、佐藤純子。北京。

国家副主席に擬せられていた廖承志氏が六月十日に急逝。氏は一九〇八年の東京生れ、早大出身、ペランメエ言葉も自在な懐の深い知日家。日本文学をはじめ百般に通じるチャーミングな政治家であった。千田是也氏とは三〇年代のドイツで、国際共産主義運動を共に闘った同志でもあった。

一九五六年の日中文化交流協会の創立は、廖承志氏と千田是也氏との友情が基礎になっている。

井上先生は「廖承志さんは周恩来総理を思い出させる人ですね」とよく言っておられた。

②② 一九八三年十二月十日～二十三日

日本中国文化交流協会代表团。井上ふみ、東山魁夷夫妻、團伊玖磨夫妻、夏堀正元、白土吾夫、佐



ウルムチ市内のパザールにあそぶ吉永小百合氏、佐藤純子、井上先生（左より）。中日友好協会の張利利氏（右）と（1984年11月13日）

藤純子。北京、開封、葵丘、鄭州、成都、上海。

北京で開かれた白土さんの訪中百回を祝う会に出席した後、開封近郊の葵丘を訪問。春秋戦国時代、黄河周辺の諸侯が集り、黄河の水を武器に使わないことを盟約した「葵丘会議」で知られる所。翌年「核状況下における文学」を主題として、国際ペン東京大会が開かれたが、井上先生は日本ペンクラブの会長として、この葵丘会議の現代的意義を説かれ、感動的な演説をされた。

②③ 一九八四年十一月八日～二十二日

日本中国文化交流協会代表团。井上ふみ、鈴木治雄夫妻、竹西寛子、大江健三郎、吉永小百合、白土吾夫、佐藤純子。北京、ウルムチ、ハミ、トルファン、西安。

五月の国際ペン東京大会には、井上先生との約束どおり、巴金先生が上海の病院から空港に直行されたこと

のことで、車椅子で来日された。周揚先生もやはり車椅子で北京からかけつけて下さった。大会は大きな成功をおさめた。

晩秋のウルムチで、井上先生は裸木の林を歩かれたり、吉永小百合さんとパザールへ行かれたり、友人の家でのパーティーではウイグル族の奥様にこわれて踊ったりと、楽しい数日を過ごされた。

北京で、胡耀邦総書記との会見があり、席上、楼蘭への招待を受けた。井上先生は「これからすぐ行きたい」とおっしゃる。陪席の一同がヒヤリとする中、胡総書記が立ち上り、井上先生の手をとり「この季節は無理です。来年にして下さい」。その場に、何とも微笑ましい空気が漂った。

②④ 一九八五年十月十四日～十九日

日中友好二十一世紀委員会。外務省の関係者と。北京、大連。

日中友好二十一世紀委員会は、一九八三年、胡耀邦

総書記の提唱によって設立された両国政府が管轄する日中の有識者による会合。井上先生は文化界を代表して参加。時には、自国の立場にのみ立つ委員の中で、井上先生の広い視野と深い洞察力にあふれる発言は、会議を円満な成功へと導かれた。中国側座長の王兆国氏は「井上先生のお言葉は、いつも、私達の心の窓を開かせて下さる」と言っておられた。

この年の八月に予定していた楼蘭訪問。私もお供を仰せつかり、砂漠用の靴や服装を整え、出発を二日後に控えている時、北京から「諸般の事情により、楼蘭訪問はヘリコプターによる空からだけということでした。解してほしい」との電報。先生は「鳥じゃあるまいし」、「楼蘭の地に足で立てるまで待つ」と返電を打たれた。その夜、銀座での井上先生は、少々荒れ気味であった。

②五 一九八六年四月二十日～五月一日

井上靖一行。白土吾夫、浦城幾世、横川健、佐藤純子。北京、鄭州、開封、新鄭、上蔡、新蔡、駐馬店、漢陽、安陽。

入浴とお召しかえをすませた先生が、さっぱりとしたお顔で机に向かっておられる。人前で走る姿などお見せにならない先生であったが、その機敏さには驚かされた。「軍隊に居たことがあるせいでしょうかね」と先生は言っておられた。

悪路にゆれる車中での取材、なぐり書きのノートが、翌朝には大学ノートに、図解入り、きっちりとした文字で清書されていた。

さて楼蘭である。この年の八月も出発直前に延期になってしまった。そのため、めずらしく日程の入っていない日を過されていた先生が「食べものがつかえる」とおっしゃったのを、ふみ夫人は聞きのがさなかった。食道癌の発見と九月二十九日の大手術。

二年後に先生は「桐の花」という詩を書いておられる（第七詩集『傍観者』に収録）。その詩に、手術後の集中治療室にしながら、自分は紫の桐の花が咲いている河南省の土屋の集落で、満開の桐の花の下に身を横たえていた……と書いておられる。

井上先生は、日本人として初めて北京大学から名誉博士号を授与された。四月二十一日の授与式で記念講演をすませた翌日から、河南省への旅に出られた。本格的な「孔子」の取材である。

二千五百年前に孔子が放浪した河南省は、薄紫の桐の花で溢れていた。地元の研究者に車に同乗してもらい、車中での取材を重ねながら、行く先々で車を止めた。二千五百年前の痕跡が残っているはずもなく、気の遠くなるような取材であった。

外国人を迎えるのは初めてという所もあり、しかもその客人は八十歳を目前にした著名な作家ということで、村をあげての大歓迎、連日、地元の白酒「杜康酒」での大宴会。私は、北京からの案内役に、何とか宴会を減らしてもらえまいかと頼んだが、聞き入れてはもらえなかった。早朝からの取材で夕刻ホテルに着くと間もなく宴会。私などは着がえのいとまもなく、地元の人に贈呈する先生の御著作にサインをいただきに上ると、お部屋はヨーモトニツクの香りに包まれ、

②六 一九八七年十月二十九日～十一月八日

井上靖一行。岩波剛、白土吾夫、横川健、佐藤純子。北京、鄭州、信陽。

大手術から八ヶ月、五月にはふみ夫人とともに渡仏。六月から『新潮』に「孔子」を連載（八九年五月まで）。健康に自信を持たれた先生は、負傷をさがす河南省への旅に出られた。

病後の先生を気づかって、中国側は釣魚台国賓館の小じんまりとした一棟を宿にあててくれた。初雪に鵲が舞う広大な庭、親しい友人に会うだけの、ぜいたくな数日であった。白土さんが、河南省行きを止めて、ここでのんびりしようとして申し上げた時の、無言で睨みつけた井上先生のお顔は真剣であった。

河南省への旅については、同行された岩波剛氏が、井上先生逝去後に追悼文として発表された文章を、氏の了解を得て転載させていただく。井上先生の呼吸が伝わって来るような玉稿である。



曲阜郊外を流れる泗水のほとりで、しばし構想を練る（1988年5月7日）

負函に立つ

孔子の放浪十三年の折り返し地点はどこか。だれも問わない問いを自ら発し、不可能という言葉に耳を藉さず、手がかりを論語の葉公との対話に求め、あらゆる文書を洗い、春秋左氏伝に「負函」の二字を発見する。それだけではない。二千年五百年前の集落はいまのどこなのか。この足でその地に立ちたい——気の遠くなるような夢を、夢に終らせないで、井上先生は実現してしまわれた。小説「孔子」の想像力の歴史的根拠を求めて、千里万里をこととしない意志と行動力、しかもそれは大患大手術のあとのことである。その旅に従ったものとしての驚きを、いま哀しみと共に思い返す。

その日、かつての負函の地、楚王城遺構には冷たい風が吹いていた。疎林におおわれた小高い丘、わずかに露出する城壁の跡、周囲に限りなく広がる赤土の野。地元の郷土史家に静かに謝辞を述べ、夕陽のなか人群れを離れてひとり、時間と対話す

るように、宙をにらみ、無言で立つ姿には、ちよつと近寄りがたい厳肅なものがあつた。
「ぼくを負函の地に立たせたのも天命だろうね」
帰りの車で、にっこりとおっしゃったその笑顔を忘れない。

（『日中文化交流』井上靖会長追悼号）

②一九八八年五月三日～十二日

白土吾夫、横川健、佐藤純子。北京、済南、曲阜。

井上先生最後の訪中である。五月四日に北京大学創立九十周年記念集會に、五日に映画「敦煌」特別試写會に出席、六日に山東省済南での八十一歳の誕生祝賀會、七日に孔子の故郷曲阜に入った。取材というよりは、連載が始まったことを孔子に報告するのだとおっしゃり、孔林を歩かれたり、泗水のほとりを散策されたりの数日であつた。七日に山本健吉氏の計報が入った時、「私は、もう、お別れをすませてきましたから……」と自分に言い聞かせるようにおっしゃつた。

「孔子」は一九八九年の野間文芸賞を受賞。一九六一年の「淀どの日記」につづく二度目の野間賞受賞である。一九九〇年には「孔子」の中国語版が、鄭民欽氏の訳により人民日報出版社から刊行された。

私は、井上先生の訪中に十六回お供をし、三十数年、御指導を受ける幸せに恵まれた。いろいろの所での先生のお姿が思い浮かぶが、中でも圧倒されたのは、二回目か三回目の治療で築地の国立がんセンターに入院された時、病室の床にうすべりを敷き、机に正座して「孔子」を書いておられた、激しいお姿である。

井上先生は、政治の季節に流されることなく、真摯に、気おうちことなく、悠然と、自然体で中国と向きあわれた。何よりも、中国人と中国文化を深く愛された。

「高原の薫風のなかの井上靖展」報告

大藤敏行（軽井沢高原文庫副館長）

軽井沢高原文庫では二〇〇七年七月二十七日から九月二十四日まで、軽井沢に別荘をもち、当地ともゆかりの深かった小説家、井上靖先生の生誕百年記念展を開催させていただいた。会期中の総入館者は七五六八人であった。

一九九六年夏、「中軽井沢・沓掛^{くつかけ}の文学展」を開催した際、井上家から「憂愁平野」の原稿をお借りしたことがあったが、今回は井上先生お一人の夏季特別展ということで、井上家から数多くの遺品、美術品、旧蔵書、写真等を拝借した。井上資料を多く収蔵する神奈川近代文学館からも原稿、草稿、創作ノート、創作メモ、書簡等をお借りし、小規模ながら、内容の充実した井上展となった。

井上靖展はこれまでも、毎日新聞社・日本近代文学館主催の全国巡回展（一九九二―九三年）をはじめ、世田谷文学館（二〇〇〇年）、神奈川近代文学館（二〇〇三年）などでも開催されている。当文庫では、それら過去の井上展を参考にしつつ、軽井沢という地で開催する井上展にふさわしい、気軽な雰囲気、コンパクトな展示ができないだろうか、と考えた。

特別展の時はいつもそうなのであるが、多くの準備作業を並行して進めていかなければならない。混沌とした状態の中で、一つ一つを決めながら、準備をしていく必要がある。

井上作品を可能な限り読む、という作業がまずある。膨大な量の井上作品を一年ほどで読むことは到底不可

能であるが、実際の展示の組み立てを思い描きながら、見落としてはいけない作品を慎重に選びつつ、幅広いジャンルの作品を読んだ。

また、資料の所在調査をおこない、過去の展覧会図録等を参考にしながら展覧会の構想を練った。これまでの井上展担当だった日本近代文学館の原祐子さんや、世田谷文学館の菊地香さん、神奈川近代文学館の藤木尚子さんから当時の話をうかがった。

そうした過程をへて、当文庫での井上靖展について、だいたい次のような方針を立てた。

- ・「井上靖と軽井沢」コーナーを設ける。
- ・スペースの都合で、歴史小説、詩のジャンルを主に取上げることにし、中間小説、時代小説等は最小限の紹介にとどめる。
- ・文学作品以外の社会的活動もおさえる。（ペンクラブ活動ほか）
- ・最後の作品「孔子」は詳しく紹介する。
- ・モノトーンの地味な印象になりがちな文学展を色彩

豊かなものにするため、井上先生と美術との関わりをなるべく示す。（可能ならば美術品を展示）

- ・立体ケースを使い、書斎を復元する。

タイトルは「生誕百年記念 高原の薫風のなかの井上靖展」（加賀乙彦館長案）と決まった。ポスターに使う肖像写真は、世田谷の自宅書斎で執筆する井上先生の写真（大塚清吾氏撮影）を選び、ポスター、チラシの制作にとりかかった。

その後、会場構成は、次の五部構成とすることに、最終的に決定した。

- 「Ⅰ 生い立ち―文壇デビュー」
- 「Ⅱ 歴史小説・詩」
- 「Ⅲ 軽井沢と井上靖」
- 「Ⅳ 美しきものとの出会い」
- 「Ⅴ 国際的作家としての活動」
- 「Ⅰ 生い立ち―文壇デビュー」では、「しるばん

ば」「獵銃」「闘牛」三作に焦点をあて、主に紹介した。幼年から四高時代までは自筆資料が少ないため、写真やエッセイの引用等で補った。

「Ⅱ 歴史小説・詩」では、「敦煌」「天平の薨」「風濤」をはじめとする歴史小説の系列を中心に構成した。井上文学の核ともいえる詩については、「黄河」「高原」の自筆原稿およびレプリカを展示した。

立体ケースの「Ⅲ 軽井沢と井上靖」では、軽井沢で撮影した井上先生の写真を等身大に引き伸ばし、壁に立てかけた。そして中央に文机を置き、周囲にガンダーラ仏、河井寛次郎の壺、梅原龍三郎「北京の空」など井上先生愛蔵の美術コレクションを飾り、書斎を復元した。

「Ⅳ 美しきものとの出会い」では、井上先生と美術との長年の密接な関わりを、東洋は河井寛次郎、富岡鉄斎、須田国太郎、渡岸寺の十一面観音など、西洋はゴヤ「カルロス四世の家族の肖像」、ゴッホ、レオナルド・ダ・ヴィンチ「受胎告知」などに代表させ、それぞれに関する創作メモ、創作ノートを数点ずつ、

セツトにして紹介した。

「Ⅴ 国際的作家としての活動」では、各国語に翻訳された井上作品、中国の巴金ら外国作家からの井上宛書簡、ペンクラブなどの社会的活動を紹介した。また「本寛坊遺文」「孔子」を草稿、創作ノート、自筆地図、参考文献でやや詳しく紹介した。

当文庫の展示室は約八十平方メートルと小さい。今回の井上展は、正方形の展示室をほぼ五分分し、五部構成の各部をそれぞれにあて、反時計回りの動線にして、会場には悠久のシルクロードの歴史を彷彿させるオカリナ演奏による音楽を流した。

また、各コーナーの最初に六百字程度の短い解説パネルをつけ、館長あいさつ、井上靖文学地図（世界）、年譜等を適宜各所に配した。総資料点数は二百八十五点であった。その中には十二点の未発表資料も含まれていた。

会期中、来館者の様子を見てみると、NHKの大河ドラマ「風林火山」が放映されていた時期でもあり、年齢層は非常に幅広かった。来館者は「しろばんば」

の原稿や書斎の復元コーナー、歴史小説の肉筆原稿をはじめ、各所で足をとめ、熱心に見入っていた。

ミュージアムショップでは『孔子』の文庫本がもつともよく売れた。母を主題にした小説三部作についての展示箇所に工夫を凝らしたためか、『わが母の記』が多く売れたのも印象に残った。

なお、会期中の関連イベントとして、八月四日の「軽井沢高原文庫の会」で川端香男里、井上修一両氏による対談「普段着の井上靖」を、八月十八日の「高原の文学サロン」で近藤信行、大村彦次郎両氏による対談「井上靖の人と文学」を、それぞれ当文庫裏庭で行ない、ともに盛況だった。

また、本展に関連して、雑誌『高原文庫』二十二号（井上靖展特集号）を刊行した。杉山平一、陳舜臣、大岡信、竹西寛子、椎名誠、小澤征爾、佐藤純子、三好徹、加藤九祚、高野昭、伊藤桂一、高橋英夫、曾根博義、井上修一、加賀乙彦の各氏にエッセイや論文等を寄稿いただいた。『軽井沢高原文庫通信』六十七号には伊吹和子氏に井上先生に関する思い出のエッセイを

寄稿いただいた。

最後に、今回の井上靖展開催にあたっては、多くの方々にご協力をいただいたが、井上家での資料借用の際に大変お世話になった井上甫壬氏、浦城幾世氏、小山乃り子氏、神奈川近代文学館での資料借用の際に大変お世話になった特別資料担当の渡邊明子さんのお名前を、この機会に記させていただきたい。

しろばんばの里・天城湯ヶ島

宇田治良（白壁荘主人）

はじめに

伊豆半島の中央、天城山の懷に位置する天城湯ヶ島は良質の温泉が豊富で、古くから湯治場としてよく知られている。今日では、天城の風光明媚な自然を満喫しながら伊豆の山海の恩恵を堪能できる観光地として、多くの観光客が訪れている。

天城を訪れる人々が抱いている魅力の一つに、天城と文学とのかわりがある。天城を舞台にした作品も多く、昔から小説家や詩人など多くの文人をひきつけてきた。

美しい自然の中で山間にたたずむ温泉郷は文学の発

祥地として独特の雰囲気を持っていて、天城山脈を源とする山ひだから漉しだされる澄みきった湧水は、万緑の木々を縫って溪谷に流れ込み、猫越川ねここかわと本谷川ほんたかになる。この二つの川が合流する地点は湯ヶ島のはば中央にあり、最も美しい景観を呈している。

また、小説や詩など幾多の文学作品に採り上げられる天城山はU字型の連山で、そのUの字の底に天城湯ヶ島は位置している。この独特の地形、山々と溪谷そして底に流れる清流によって湯ヶ島の景観は作られている。少しメランコリーな雰囲気魅せられ、作家川端康成も約十年の間、湯ヶ島に逗留していた。

小説「しろばんば」の舞台でもある湯ヶ島は、筆者井上靖先生が、三歳から十二歳までの少年時代を過ご

した土地である。

「しろばんば」は井上先生の自伝的小説で、両親から離れ、血の繋がらない祖母と土蔵で過ごした特異な幼少期を湯ヶ島の自然や生活、四季の移り変わりと共に描いており、作家井上靖を形成するさまざまな要素を見て取ることができる。

詩人的資質を育てた自然感覚、先生の女性像の源流となつている叔母への憧憬、都会への劣

等感などそこにあらわれるものすべてが作家井上靖の土台となつていて、この作品に描かれた特異な幼少時代なくして作家井上靖は考えられない。

豊かな自然と温泉場の心温かい人達に



葉の上ののっている「しろばんば」

囲まれて、野山を駆け遊びまわった環境は今も残っており、文学の世界に引き込まれてしまうような懐かし

い心の原風景もある。

私は湯ヶ島に住むものとしてこの環境を大切にし、井上文学の素晴らしさを多くの人たちに伝えてゆきたいと思つている。

1 しろばんばという言葉について

夕方になると、決つて村の子供たちは口々に、しろばんば、しろばんば、と叫びながら、家の前の街道をあつちに走ったり、こつちに走ったりしながら、夕闇のたちこめ始めた空間を綿屑でも舞っているように浮遊している白い小さい生きものを追いかけて遊んだ。（中略）しろばんばというのは、白い老婆おばあさんということなのであろう。

（井上靖「しろばんば」）

「しろばんば」はこのように小説冒頭に登場する。

一般には「雪虫」と呼ばれる事の多いこのしろばんばは、調べてゆくと伊豆の中でも狭い範囲で呼ばれ方だとわかった。天城の中でも青羽根より下の地域では「しろっこ」と言う名前に変わってしまう。峠を越して稲取方面では「ほうそうばんば」という名前と呼ばれているようだ。

2 「しろばんば」の舞台

国道四一四号線下田街道沿いにある天城温泉会館の建っている位置に、井上先生が通っていた小学校があった。そこから下田街道の東側が「しろばんば」の主な舞台である。

そして下田街道の西側に私も住んでいる西平と言われる地域があり、初代井上玄春が四国から移り住

んだ。その後、井上先生の曾祖父にあたる五代目の潔が母親、妻と三人で暮らすため小説の中に出てくる「上の家」を建て引越している。

下田街道の西側には熊野山という山があり、ここに井上先生が眠っている。



井上家初代玄春から常次郎まで四代の墓

① 西平

初代玄春から常次郎まで四代のお墓も西平側にある。初代の井上家があった場所は、今でも「元屋敷」と呼ばれている。私が子供の頃にそこはすでにほとんど田んぼになっていたが、真ん中に井戸があった。その家屋の一部が現在も残っており、当時の様子を窺い知ることのできる貴重な資料である。なお、その現存す

る部分は、現在は足立家の一部となっているが、この足立家と井上家とはいろいろなつながりがある。井上先生の文章にも、玄春は湯ヶ島のある農家（足立家のこと）にわらじを脱ぎ、今でもその家とは親戚づきあいをしているという事が出てくる。

西平にある庚申塚、常夜灯の足の部分には寄進者の名前がある。右から足立太兵衛、安藤治良左衛門、井上玄春、裏に安藤弥三兵衛の名があり、安永四年（一七七五）と刻まれている。宝暦八年（一七五八）に湯



庚申塚の常夜灯と脚の部分の拡大図

ヶ島に入ってきてから十七年、医者（おそらくは漢方医）であった玄春は、早いうちから湯ヶ島で重要な地位についていたのだと思われる。

地元の氏神、西平神社は昔から何故か「金比羅さん」と呼ばれていたが、そう呼ばれる理由が最近になってわかった。玄春が四国から移り住んだとき、「金比羅さん」のお札を持って来たのがその始まりのようである。ただ、現在のご神体は金比羅ではない。明治の初めに湯ヶ島にいくつかあった神社が天城神社に統合された。それが解かれたとき、西平神社は山の上に昇ったが、そのときに何故かご神体が変わってしまった様である。しかし、未だに地元では「金比羅さん、金比羅さん」と呼ばれている。

② 久保田と宿

現在の地図でみると下田街道と旧下田街道とがぶつかった所に昔は駐車場があった。そこから少し離れた井上邸跡（おぬい婆さん）と暮らした土蔵の敷地跡）には、「しろばんば」の文学碑が建立されている。更に



左が「上の家」、右が「幸夫」の家（現在の写真）。この角を曲がると元の帝室林野局（営林署）の前に出る。

南には「上の家」があり、「幸夫」の家、天城屋（造り酒屋）、現在の小学校、弘道寺、天城神社など、「しろばんば」や井上先生を知る上で重要な場所が点在している。「上の家」の近くに登場人物の一人、浅井光一のモデルとなった足立芳郎さんの家（現在は本屋になっている）があった。この本屋は昔から「桜屋」と呼ばれていたが、今でも大きな山桜が咲く。当時、この山桜を境として井上先生が住んでいた久保田

父と母が見ている校庭で
ボールを投げる。
誰よりも高く、美しく、
真直ぐに、天にまで届けと、
ボールを投げる。

この中に「富士は父、天城は母」というフレーズがある。ご子息である井上修一さんによると、小学校時代を親から離れ天城で過ごした先生は、両親が近くにいなかったゆえか、本来両親へ向けられる愛情が、その分自然へと向かっていったようだ。

井上先生が愛した自然の一つが富士山であり、富士の事をよく文章に書いている。小学校四年生のときの作文には、「学校に行くときも、巾着淵に泳ぎに行くときもいつも富士に見られていました」とある。「富士を見る」というのが一般的な言い方であるのに、「富士に見られ」とする所など当時から文才を示している。

もう一つが天城である。天城については、小学生時

と宿にしゆく分かれていて、幼い頃の井上先生は一人で宿のほうに行くと、宿の子供たちにいじめられたそう。

③湯ヶ島小学校

現在の湯ヶ島小学校の校庭からは楮人の山を望むことができる。楮こうぞの人と書き、「かんざぶと」と読んでいる。楮とは和紙の原料となるクワ科の植物の事。

この楮人は小説ではそりすべりのときに出てくる山であるが、当時は茅場であった。もっと古い時代、修善寺和紙の最盛期には、湯ヶ島でも楮や三桎ろくまを生産していた。そのため、楮人と呼ばれたと思われる。また、湯ヶ島に楮場かんざうばという地名も残っている。

湯ヶ島小学校には井上先生の筆跡による詩碑がある。

地球上で一番清らかな広場。
北に向って整列すると、
遠くに富士が見える。
廻れ右すると天城が見える。
富士は父、天城は母。

代を過ごした所でもあり、山の名前、風景に留まらず、湯ヶ島の周りの人々、自分を育ててくれたお婆さん（「しろばんば」の「おぬい婆さん」）、そういうものを「天城は母」と表しているように思える。

先生はまさに富士に見守られ、天城にいだかれた作家と言えるだろう。

小学校の校庭には詩碑以外にも井上先生の記念の物がある。ブロンズ像はおぬい婆さんと洪作を主題にしたもので、洪作が持っているのはヒバの葉のようである。

もう一つ、足立文太郎顕彰碑がある。この石碑は井



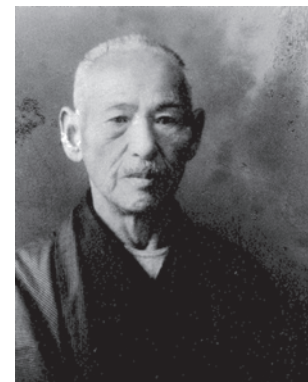
足立文太郎



昭和 31 年秋、白壁荘玄関前で写す。中央が井上靖先生、右が先代・宇田博司、左は先代の義弟・宇田正治、奥は湯ヶ島の詩人・浅田一夫



左から亀男、平一、芳衛、幸夫（「しろばんば」作中人物名）



上より
井上潔・井上文次・浅田六平

上先生の奥様のお父様で、医学博士として知られる足立文太郎の顕彰碑である。表に「懸命不動」の文字、裏には博士の紹介と共に「井上靖撰」の字が見える。

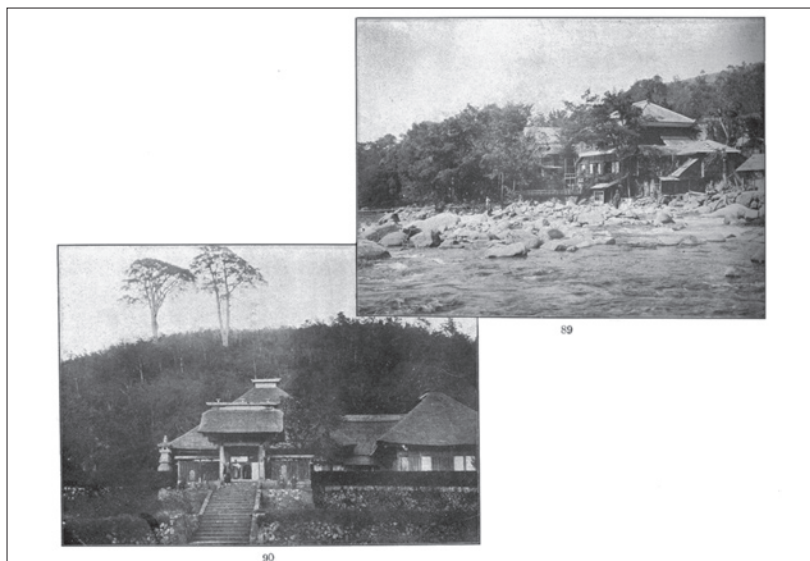
3 写真に見る当時の様子

井上家の人々についても写真等の資料がいろいろと残っている。井上文次は井上家と元々親戚関係にあり、靖の曾祖父にあたる潔の姉まきが嫁いだ天城屋（造り酒屋）の長男で、潔に子どもが無かったため井上家に養子に入っている。

この天城屋の当主・浅田六平は井上靖、川端康成両方の随筆に登場する人物で、川端が天城に滞在中、一番多く碁を打った相手でもある。

私の家には、五十歳の頃の井上先生が先代と写っている写真がある。また天城屋に残る写真には、「しろばんば」の登場人物、亀男、平一、芳衛、幸夫（すべて物語の役名）が写っている。

楳人から見た「しろばんば」の舞台の写真も残っている。写真右側に井上先生が通っていた当時の小学校、その隣に井上医院、井上先生が暮らしていた土蔵、写真中央に造り酒屋の天城屋。現在の小学校はこの写真



『伊豆鏡』より。右上が湯本館、左下が弘道寺



楮人から望む「しろばんば」の舞台（大正末期頃）

井上先生と同級生、足立芳郎さんの写真もある。晩年の写真であるが、小説には、いじめっ子の上級生に毅然として立ち向かって行った少年・浅井光一として登場する。また「忘れ得ぬ人々」の中では少年Aとして出て来る。井上先生とは勉強のライバルであり、優秀な人であったようだ。

もう一つ貴重な写真で中島基^{もと}の写真も残っている。井上先生にいろいろな影響を与えた小学校の教師で、この写真は昭和二年のものである。裏面には、中島先生から足立さんへの励ましのメッセージが残っていた。天城屋には伊豆で最古の日英両文のガイドブック『伊豆鏡』が残っていた。大正三年白浜村の勝間田泰平が発行し、定価は三円五十銭であった。上部に掲載したページには弘道寺と湯本館が写っている。弘道寺はタウンゼント・ハリスが日米修好通商条約を結ぶため下田から江戸に上る際に、二日目に泊まった宿泊所として知られている。井上先生の子供時代の遊び場の一つで、年二回「お薬師さん」という祭りがあったという事が「幼き日のこと」に記されている。また、

では左側の土地になる。土蔵が写っている写真は、いろいろ探したが他に見つからず、この一枚だけである。撮影者は林良平、河津にある林写真館の主人・林良之の曾祖父で、大正時代に伊豆一円の写真を撮っている。



中島基



足立芳郎

湯本館の写真の右側には井上先生がエッセイに書いた馬の湯（現在の西平の共同湯）の一部と思われる建物が写っている。

『伊豆鏡』では前述の写真に添えて、上狩野村湯ヶ島温泉場について、日露戦争で名高い上村大将の歌に「千早ぶる 神の恵みの清滝に 心の塵も洗い尽くして」、東郷元帥の歌に「湯ヶ島の 水も清けき落合の 忘れもあえずわたるつり橋」などと歌われている事もまじえつつ紹介しており、この地が当時から有数の温泉場として知られていた事がわかる。

湯ヶ島小学校のPTAが作成した資料も当時の様子を知る上で参考になるものである。小学校の見取り図、足立芳郎が当時を思い起こして井上先生の事を書いた文章、明治時代の湯ヶ島小学校の資料からは更に昔の時代の様子もわかる。

4 湯ヶ島のバイブル

二冊の本がある。「しろばんば」の解説書とも言え

る『幼き日のこと』と、川端康成が東京と湯ヶ島を往復していた頃の随筆『伊豆の旅』である。中公文庫で出ている『伊豆の旅』は、湯ヶ島の事、伊豆の事を詳しく書いており、「伊豆の踊子」を書いた理由などにも触れていて興味深い。井上先生の関連で重要なのは、「井上さん」という言葉が出てくるところである。川端康成は、湯ヶ島で囲碁を覚えている。彼に囲碁の手ほどきをしたのは当時の郵便局長で、その仲間と囲碁を打ったのだが、多く相手をしたのは前出の天城屋の浅田六平だった。そして浅田と共に囲碁クラブの会員であった井上文次とも、よく打った。『伊豆の旅』の中の「伊豆の踊子」の装幀その他」の所に井上さんの名前が出て来る。

井上さんとの手談も久しぶりだった。去年の春は度々家へ行つて、光男さんの釣つて来た山女を御馳走になったものだったが。

この井上さんというのが井上文次の事であり、家と

ある。

この二冊は、我々にとって「湯ヶ島のバイブル」とも言うべき貴重なものである。

おわりに

井上先生は国士峠こくしとうげからの富士の眺めが好きだった。今では植林が進み、昔の風景は無くなってしまったが、今でも写真資料に見ることができる。

二〇〇七年は先生の生誕百年で、湯ヶ島の人間として微力ながら井上先生の素晴らしさを伝えるお手伝いをさせて頂いた。地元の組織では、文学散歩ができるように案内板を設置し、小説に出て来る場所の表示をした。

井上先生は、湯ヶ島が「自然の美しさを観賞する場所としての姿勢を、いつまでも失わないで貰いたい」と随筆「湯ヶ島」に記している。井上先生が愛した自然と共に、湯ヶ島に残る「しろばんば」の貴重な資料を我々の財産として語り継ぎ、文学を愛する方々



国士峠からの富士の眺め

だけでなく、湯ヶ島を訪れてこれから井上先生の本を手にする方々にも、先生にとつての母なる湯ヶ島を慈しみながらいつまでも紹介してゆきたい。

付記——この文章は『伊豆の郷土研究』（第三十二集、二〇〇七年六月）に発表したものを改稿した。



井上靖文化賞・要項

この賞は井上靖を記念し日本文化の向上に資するため、文学・美術・歴史等の分野において優れた業績をあげた人・団体を顕彰するものである。（財団設立は平成四年、第一回の顕彰は平成五年）

対象

文学・美術・歴史等の分野における創造的な芸術活動や、卓抜した学術の成果ならびに多年にわたる実践や地道な研究で、今後の一層の活躍が期待されるもの。（当年度の業績に限らない）

選考

文学・美術・歴史等の各界における専門家および作家・評論家・ジャーナリストなど多数の方々から贈賞対象の推薦を広く求め、理事長の委嘱する選考委員会で決定する。

贈賞

顕彰は年一回とし、原則として複数贈賞は行わない。賞状および記念レリーフ、賞金一〇〇万円を贈る。

運営

井上靖記念文化財団が主催し、一ツ橋総合財団がこれを後援、実施にあたって協力する。

選考委員

任期は三年とし、再任を妨げない。

大岡信 菅野昭正 平山郁夫

（五十音順・敬称略）

事務局

東京都千代田区神田神保町二一十七ー十共同ビル

財団法人 一ツ橋総合財団内

「井上靖文化賞」事務局

☎〇三―三三三―〇一六〇六二

第十五回井上靖文化賞

嶋田しづ氏に



受賞者の嶋田しづ氏

平成十九年十一月十九日、第十五回井上靖文化賞の最終選考委員会が神田駿河台の山の上ホテルで開かれ、嶋田しづ氏に贈賞が決まりました。
平成二十年二月二十一日、同じ山の上ホテルにて贈賞式ならびに祝賀会が行われました。

嶋田しづ（しまだ・しづ） 画家

本賞は美術に限らず、文学・音楽・歴史等の分野において優れた業績をあげた人・団体を顕彰するものである。嶋田しづ氏はパリで培った西洋と根っこにある東洋を融合した独自の絵画を創作している。

一九二三年 樺太（サハリン）に実業家・嶋田久四郎と妻キヨの三女として生まれる
一九三七年 東京・中野宮園町に居を移す
一九四二年 女子美術専門学校（現・女子美術大学）師範科西洋画部油絵科を卒業

一九四五年 早稲田大学文学部芸術科東洋美術史専攻を修了。同大学では會津八一教授に師事

一九五五年 二紀展同人賞を受賞

一九五六年 二紀展同人優賞を受賞

一九五七年 二紀展最優秀賞を受賞。東京国立近代美術館での第一回「安井賞候補新人展」に出品。また、グループ展としてフォルム画廊、くぬぎ画廊、村松画廊等に出品
渡仏。アカデミー・ド・ラ・グラン・ド・シヨミエールで絵画、アカデミー・ランソンとアトリエ・ヘイターでエッチング、アカデミー・フリードランデルでリトグラフを学ぶ。以後二十年、パリ画壇を中心に活躍する

一九五八年

一九五九年 アンデパンダン展、サロン・デ・ジュンヌ・パントル展等に出品。サロン・ド・メ展、サロン・ドートンヌ展、コンフロンタション展等に招待出品

一九七一年 絵画国際フェスティバル展民族賞を受賞

～
する（カーニュールシユルメール美術館）。ブリュッセルのアルカーヌ画廊、ナントのベクレ画廊、ルクセンブルグのオーン画廊等で個展、グループ展開催

一九七八年 帰国。神奈川県逗子市の丘陵にアトリエ構築。帰国後は美術団体に属さず、個展を中心に活動。南画廊で作品展
一九八〇年 東京セントラルアネックスで「新作とその回想二十年展」を開催。神奈川県立近代美術館で「今日の作家たちⅡ」開催。

～
フジテレビギャラリー（八四年～〇六年まで九回開催）、フジキ画廊、77ギャラリー等で個展を開催。日本秀作美術展は隔年出品。大原美術館に出品

二〇〇七年 池田二十世紀美術館で「嶋田しづ展」
二〇〇八年 東京77ギャラリー、富山県高岡市美術館、京都アートフォーラムジャルフォにて個展開催予定

受賞のことば

奇跡とは、何の前ぶれもなく、突然にやって来るものなのです。今回、大変に誇り高い井上靖文化賞を授与されることとなりました。誠に夢のような受賞であり、光栄の極みでございます。特に私が喜んだのは、美術に限らない幅広い分野に及ぶ文化賞をいただいたことでした。

戦中と戦後の混乱と、復興にともなう種々の葛藤をくぐりぬけて渡仏。ヨーロッパ画壇の中の戦いと、その歴史を踏まえながらの二十年間が走馬燈のように胸をよぎります。

一九五八年、一年の予定を立て留学を志し、単身出発したパリは、まさにエコール・ド・パリの華やかさの真っ只中でありました。

第二次大戦終結後、人々は世界中から集まり、個人の幸福、権利等について夜を徹して議論し合い、芸術文化の王国を謳歌していました。

モンパルナス、サンジェルマン・デ・プレのキャフエを拠点にし、デュビュッフエ、スーラージュ、アペ

ル、イヴ・クライン、ニコラ・ド・スタール、ジャコメッティ、藤田嗣治等の画家をはじめ、彫刻家、詩人、哲学者らが交流していました。そして、ボーヴォワール、カミュ、サルトルらの実存主義者の会合も日夜行なわれていました。

そんななかで私は仕事に没頭し、仲間とアトリエで作品を批評し合ったり、より良き充実したサロンに招待されるべく、良き個展を開催すべく、噛み合う歯車の如くに回転し続けました。時には旅にも出掛け、ほんとうに充実した日々を過ごしたと思います。創作活動も次第に順調となり、展覧会、個展へのオファも増えてきました。帰国するまで一年の予定が、二十年間、パリで過ごすことになりました。

井上靖さんの作品のなかでは、「天平の薨」に特に心ひかれました。僧普照と栄叡は遣唐留学僧として唐に渡り、二十年の歳月の信仰と好學とその苦難、グラン・スペクタクルで展開する時代性はパリ時代と重なり合って、私の胸をしぼる強さで刻みました。

一九七八年、帰国。神奈川県逗子市の丘陵にある両



右より菅野昭正氏、嶋田しづ氏、大岡信氏、井上修一

親の地にアトリエを作りました。どの美術団体、画壇にも属することなく、個展中心に我が信ずるままの仕事を持ち続けて一日も休んだ記憶のない、画業に集中した日々でした。

刺激的ではあっても厳しい実力主義の世界での交流は高い美意識の直感と創造力と現代的なセンス・アンテリジャンスを要求されます。

パリの市の紋章「漂えど沈まず」——ラテン語 FRUGTUAT NEC MERGITUR は、私の仕事のうえでの大きな支えとなっている座右の銘です。

推薦のことば（選考委員代表）

「嶋田さん、おめでとう」 大岡信

嶋田しづは日本の戦後早い時期に二紀会に所属して、一九五五年同人賞、五六年同人優賞、五七年最優秀賞と三年間二紀会で連続受賞の栄誉に輝いたが、この異例の俊才画家は、翌年早くも日本を去って渡仏、希望に胸ふくらませてパリの土を踏んだ。以来二十年間、



ケーキに入刀する嶋田氏

パリ画壇の人としてすごし、時どき日本でも個展を行なうだけだったが、一九七八年四月帰国し、神奈川県逗子に居を構えた。

私は一九六九年、嶋田しづが東京の日本画廊で開いた個展の折、彼女から直接手紙で依頼され、個展のカタログに一文を寄せたが、それ以前にはまったく面識もなかった。しかし、彼女の帰国後は、展覧会のためごとに作品を見守ってきて今日に至っている。

「東洋的な繊細さ、そして堅固な構築性」 菅野昭正

美とは直観である、とりわけ抽象絵画においては——私が勝手に編みだした我流の美学概論のある頁には、ひそかにそう書きつけてある。

具象の場合はそうはゆかない。まず全体を見渡してから、気になる細部と全体との関係を確かめるとか、細部の形や色を素人なりに分析的に鑑賞するとか、かなり手間がかかる。それからやっと、どんなふうにと、どのくらい美しいか、自分なりの評点が決まるのである。

そこへゆくと、抽象は速戦即決である。注意ぶかく見渡した瞬間、画面から美しさが発光してくるかどうか。画家の内面に揺れうごく夢、幻想、無意識が、美しい形態、色彩に造型されているかどうか、その瞬間にすばやく捉えるしかない。分析的、反省的に見直したりする余地がそこにはない。

嶋田しづ氏の作品に私はじかに接したことがない。複製を図録で拝見したにすぎないのだが、はじめに眼

嶋田しづについて思う時、私が必ずといっていいほど思い出すひとつのエピソードがある。それは彼女が希望に胸をふくらませてパリの街を歩み出した一九五八年秋のころ、パリの街のいたるところ、つまりメトロの入口その他で見かけたラテン語の銘文を、嶋田しづが頭にしっかりと刻みこんで記憶した、ということである。

それは「漂えど沈まず」 FRUCTUAT NEC MERGITUR という銘文だった。パリの市の紋章に採用されたこのラテン語は、嶋田しづにとってもまことに好ましい銘文だったと思われる。

後日、彼女はこの銘文を引いて自分の信条表白の文章を書いているほどだが、今回、「井上靖文化賞」の荣誉に輝いた嶋田しづの芸術家人生を祝福するのにも、まことにこの標語はふさわしいと思う。「漂えど沈まず」。

にとまった瞬間、全体のしなやかな構成のなかに、凛とした筋が通っている美しさを感じた。そこには、世界と人間の穏やかな側面を感じとる東洋的な繊細さがあり、一方にまた、世界と人間を堅固な構築性において捉える感覚が生きている。それは女性の抽象画の特質だという気もするし、西洋で長いこと画業に打ちこまれた日本人の画家として、自然に身に着けられた嶋田流の美学であるとも思える。

受賞をお祝いするとともに、実際に嶋田氏の作品を前にしたとき、私のそんな予感が、みごとの中するにちがいないと確信している。

第十五回井上靖文化賞贈賞式のパフレット（一ツ橋総合財団発行）より転載。写真提供・一ツ橋総合財団。

微笑のひと

永瀬嘉平（毎日新聞社終身名誉職員）

井上靖さんを知ったのは私が毎日新聞社に入ってからのもので、とりわけ言葉を交わすようになったのは晩年のころであった。

幾度となく世田谷・桜の閑静で落ち着いた和風造りのお宅に伺ったが、町名のとおり、あたり一帯は春ともなると染井吉野に覆われ、櫺（けやき）の木立ちが目についた。広い応接間でいつも井上さんの真剣な話に耳を傾けた。そして私のつまらない話にもよく耳を貸してくれた。いつしか熱っぽく語り、井上さんの目が輝きを増してくる。その様子はまるで「しろばんば」のころの多感で早熟な少年期へ舞い戻っているようだった。

とにかく井上さんは好奇心と学習意欲が旺盛で、とことん納得のゆくまで調べあげた。そのため常に大学

ノートを手元に置き、細やかな図表なども書き添えていた。

あの一連の壮大なシルクロードを中心としたロマンあふれる歴史小説では、主人公の目に映じた、細やかな情景が見事に活写されているが、井上さんがシルクロードの地に足を踏み入れたのはずっと後のことだった。それまでは膨大な資料と類まれな想像力をふくらませて執筆していたのだ。

そんな井上さんに対して、私はちよつと神経質な人かもしれないとおもっていた。ところがあるとき私の質問でその疑問は氷解した。

井上靖さんの靖という漢字が、出版社によって靖、だつたり、靖、だつたりとまちまちなので「靖なのですか、

靖ですか」と尋ねたのだ。するといつもの微笑をうかべながら「どちらでも好きなように。僕は少しもこだわりませんよ。多分、昔のことですから戸籍では靖になっているんでしょうね」と答えて下さった。

ちなみに書棚から井上さんの本を取り出してみたら毎日新聞社、講談社、文藝春秋、筑摩書房などでは「靖」であり、集英社などでは「靖」になっていた。

社の原稿取りでも、個人的なことでも井上邸を訪れていたが、話しはじめるとたいていは熱っぽくなり、「僕はこうおもっているのですが、君はどうおもいますか」などと門外漢で無知まる出しの私に尋ねてきたりした。そして私がかんり頓珍漢な答をしてしまうと、まるで昔の寺子屋で子供たちを教えるように、わかりやすく正解を示してくれた。そのたびに書庫からぶ厚い字書や古書を出してきた。そして話はいつしか果てのないシルクロードのように広がり、やがて靖ワールドの中へと吸い込まれてゆくのだ。大好きなお酒が入るとますます饒舌になる。

井上さん宅へは通常は社のクーポン券を使ってタク

シーでゆくのだが、ときにはのんびりと走る世田谷線に乗って上町の駅で降りて、世田谷通りを歩いてゆくこともあった。本道から少し離れると緑や花が目についた。大家が建ち並ぶ中であつて井上邸では櫺の大木がまるで天空を支えているかのように力強く立っている。関西で言う「高槻」である。井上さんはこの櫺が好きで、私小説風の「櫺の木」を書いている。

庭には紅梅や柚子などが植えられ、ふみ夫人が楽しみにしている家庭菜園もつくられていた。春のはじめにはウグイスやメジロやシジュウカラやジョウビタキやオナガなどが飛んでくる。一度はフクロウの姿も見えたとか。ふみさんはときどき双眼鏡を手にガラス戸越しにバード・ウォッチングを試みる。

いつ訪ねてもかならず広い応接間に通され、素朴な感じの中年のお手伝いさんがお茶とお菓子を運んでくる。部屋の壁面には大型の書物がずらりと並び、菜園に接する窓辺の棚には友人であつた陶芸家の河井寛次郎さんのみごとで力強い作品が陳列されている。またガラス戸棚の中では縄文時代の局部磨製石斧（せきこ）がにぶい

光を発していた。

待っている間に井上さんは隣りの書斎で原稿の最終チェックをしている。大作家宅の原稿取りという、たいていは玄関先で長い間待たされるとというのが普通なのだが、井上さんはけっしてそうはしなかった。

あるときその理由を私に話してくれた。

「僕はね、昔、大阪の毎日新聞社の学芸部にいてね、偉い作家や日本画家などを担当し、随分と原稿取りや取材にゆかされたものです。ゆくとほとんどが薄い座ぶとん一枚で玄関の上がりかまちに座っているんです。東京と違って冬の関西、とりわけ盆地の京都の底冷えはたいへんなものです。まるで冷蔵庫の中に押し込められたようでした。そんなつらさを体験したので、僕はどなたであろうともけっして玄関で待たせることはしません」

真底からやさしい苦労人なのだ。

井上さんのもっとも深くて忘れられない想い出は、昭和五十五年三月のインドネシアでの仏蹟巡りだった。いまでもその半月ほどの出来事を昨日のように覚えて

いる。

仮のツアー名は「海のシルクロード探査隊」だった。ローマと長安を結ぶ陸のシルクロードは周知のことだが、海のシルクロードについては意外と知られていなかった。陸のシルクロードは、その終着点である長安から、さらに海を渡って奈良の東大寺や法隆寺に、ローマのガラスや仏像などをもたらした。同じく海を隔てたインドネシアのボロブドールにも、仏教や香料、織物などがもたらされており、これらのルートを私たちは仮に「海のシルクロード」と呼んだのである。

団長に井上靖さん、それに昭和の大修理を成し上げた東大寺管長の清水公照さんが副団長、日本画家の平山郁夫夫妻、そこに記者の私、カメラマン、元ジャカルタ支局長のOさん、新聞社の事業部のMさんが加わった。

主たる目的は、先にも記した「海のシルクロードの探査」といった大仰なものだったが、その実はのんびりとした観光ツアー、いや大名旅行と変わらなかった。メンバーがメンバーだけあって、どこへゆくのもV

IP待遇だった。

井上さんはゆく先々でおみやげ屋に入っては孫たちへの品を選んでいった。同じ年ごろの娘がいた私に、いつもその選定をまかせた。ちなみに平山郁夫さんは美知子夫人が財布のひもを握っていたので、旅の間中、お金を手にすることがなかった。

東大寺管長の清水公照さんはやたらとガラクタを買い求めている。バティック（染物）に使う銅製の重い型や長持のような大型の家具まで買っていた。すべて海のシルクロードの到着点、東大寺へと送り届けていた。興味深いのはこうした世界各地の品々も、すべて管長職を辞するとき、東大寺の収蔵品となるのだそうだ。大寺に古い品々が寺宝として残る仕組みがこのときはじめてわかった。

ツアーの前日に、私は葉山の團伊玖磨さん宅を訪れていた。そのとき團さんがこんな話をして下さった。「インドネシアを訪れたら、ぜひともソロ川に行ってみて下さい。いい場所ですから」

團さんは名曲「ブンガワン・ソロ」を想って言った

のだろう。ツアーのコースにはソロの王宮見学はあったが、川への旅は盛り込まれていなかった。私は日本語のわかる現地のガイドに頼み込んでソロ川へと向かった。もちろん「ブンガワン・ソロ」の曲が流行していた当時にあった川下りの観光船などはすでに廃止されていた。ソロ川はインドネシアのどの川とも同じようにチョコレート色をした濁流がゆったりと下っていた。対岸の民家の下では、女性たちがマンディ（沐浴）をしていた。全裸にこそならなかったが、きれいな姿体を水中に隠していた。なんとなく書きづらいことだが、私たちは木の間越しに眺めていた。

ちなみにバリ島では四十年ほど前まではどの川でも、女性たちが全裸でマンディを楽しんでいたようだが、心ない観光客がカメラを向ける（ほとんどが日本人）ので、そうした伝統の習慣もなくなってしまうとかある日のこと、車でジャカルタの街を走っていると、巨大なモスク（イスラム教の寺院）が目に入った。「ちよっと立ち寄ってみましょうか」と井上さんがガ

イドに言った。シルクロードの旅を重ねてきた井上さんにとって、モスクはすでになじみの場所だった。

白亜のモスクの中に入るとコーランの声高な朗誦^{ろうしちやう}がドーム全体に充滿していた。まっ白な服を身にまとった敬虔な信徒がべったりと顔を床につけ、さかんにメッカの方向へお祈りをくり返していた。異教徒である私たちに関心を向ける者など一人もいなかった。

かつてイスラエルのエルサレムで、ユダヤ教の教会（シナゴーグ）へ入ったときのことをいまでも忘れない。重い扉を開け一歩中へ入ったとたんあびせられた冷たい視線にたじろぎ、足早に階段を下りたことがあった。私たちはドームの中で信仰心いっぱいの人たちの動作をしばらく見ていたが、突然、井上さんが前に数歩出てゆき、いきなりべったりと床に座り、両手を前にまっすぐ伸ばすと頭と胸とを床につけ、そのままの姿勢をしばらく保った。

絹を裂くようなコーランの朗誦が堂内に流れている。井上さんは幾度となく同じ動作をくり返していた。

私たちはその行動に少し驚いていた。私は内心こう

議な目で見ていた。

ある夜、滞在していたホテルの「レミー・マルタン」が切れてしまったというので、急遽私は外へと求めにいった。もともと酒を飲まない国柄、酒屋をさがすのに苦労した。それでもなんとかして型の似ている酒を手に入れた。しかし井上さんはまったく手をつけずにいた。こと酒に関しては頑固なのだ。

同行していた平山郁夫画伯も同じようにお湯割りで飲んでいた。ある夜、美知子夫人が画伯にただした。

「あなた、どのくらい飲んだの」

画伯はひと差し指と親指とを近づけて「ほんのこのくらい」とジェスチャーで答えた。すると美知子夫人かなりきつい口調でこう言った。

「ほんのちよつとでも、何杯も飲んでいればいっぱいになるのよ」

これには画伯、二の句が継げなかった（画伯はその後薬師寺の大壁画完成までの十年禁酒した。いまはどうしているのだろう）。

ジヨク・ジャカルタのホテルでの画伯と美知子夫人

おもった。「もしかしたら井上さんは、隠れ回教徒ではないか」と。「サマルカンドで、あるいはイスハンで、それとも……、回教徒へ改宗していたにちがない」と。

ドームから出て、私は井上さんにおそろのおそろ尋ねた。

「もしかしたら、回教徒だったりして……」

すると井上さん、日焼けした顔にまっ白な歯をのぞかせながら首を振り、そして微笑した。

「いやあ、信仰心じゃありません。ちよつとだけ「真向法」を試みただけですよ」

それを聞いて誰もが笑い安心した。そして私はやっぱり「しろばんば」の少年だ、とおもった。真向法とは整体術の一つで、健康づくりに井上さんは以前から取り入れていた。

井上さんとはびきりの酒豪、毎日一本コニャックの「レミー・マルタン」を空にしていた。インドネシアの滞在中にもつねにお湯割りで口に入れていた。酒に縁のない回教徒国民は、お湯で割るという行為を不思議

のやりとりがおもしろくて、今でも想い出しては笑うことがある。

ある日、ホテルの一室で、民俗衣裳を身にまとった若い娘を画伯がスケッチしていた。画伯がポツリとガイドに言った。

「インドネシアの民俗衣裳がこんなにきれいとは知りませんでした。実にすばらしいものです」

ガイドはこう言った。

「ええ、そうなんです。どれも自然の草木染めで身体にもいいんです。それにインドネシアでは島ごとに衣裳の柄が異なるんです」

すると画伯、例の大きな目をぎょろりと動かして「みんなスケッチしたいものです」

ドアのそばに立っていた夫人が口をはさんだ。

「あなた本気で、みんなスケッチするつもりなの」

画伯は「ええ、まあ」と言った。

「あなた知っているの？ インドネシアには島の数が一万以上もあるのよ」

私は廊下に出て、口到手を当て笑った。

インドネシアの滞在中、とくにボロブドールを見学してきた夜などは一部屋に集まり、井上団長が、ボロブドール仏跡の基壇をつくっている「須弥山」について、図示しながら説明して下さるのに、私たちはじっと耳を傾けた。

何事にも熱心でとことん追究する姿、井上さんの記者魂といったものを、私はそのときの旅で知った。

それから何年か経って、いつもの強い酒が身体にこたえたのか、井上さんは食道ガンを患い、手術をうけた。そしてお酒はほとんど飲めなくなった。

すこし体調が回復したころ、執筆をお願いにいった。それは井上さんのお目になかった日本の国宝の中から百点を厳選してもらい、『国宝百選』という豪華写真集をつくるというものだった。企画担当する私は幾度となく桜町の井上邸を訪ね、ミーティングを重ねた。

「観音像、とりわけ十一面などにはいいものが多いね。あり過ぎて選び出すのがむずかしいほどです。絵画にしても同じです。ただし私としては武具類は外そうとおもっています。美術的価値は充分にあっても、

いざ国宝となるとちょっと」

いかにも平和主義者の井上さんらしいご意見だった（先の大戦で井上さんは北支へ渡っている）。

ある日、私は東京都町田市小野路町の縄文時代早期の遺跡で表面採集した岩偶などを持参した。いずれも三センチ大の小石に人の怒りの表情やトリやサカナやサルなどが線刻されていた。とりわけ赤い色の小石などはサルの立像や座像になっていた。

どこの遺跡からも出土していない珍しいものだ。多分、まじないのようなものに使われていたのだろう。古代メソポタミアやエジプトにはアミュレット（護符）があつて、ハチやサルなどが線刻されている。

井上さんは大きなルーペを手にながらそれらの小石を一つずつ克明に見ていた。その表情は何か新しい獲物を見つけたときのキラリと光り輝く子供のようなだった。そしておもむろにこう言った。

「国宝百選はとりあえずあとにして、まずは君のこの奇妙で不思議な小石を国宝にしましょうよ。これはぜひとも江上波夫さん（騎馬民族渡来説を唱えたオリエ

ント考古学者）にお見せして判断されたいね。きつと適切なアドバイスをくれますよ。今日はほんとうにすばらしいものを見せてくれてありがとう」

すっかり感心されてしまった。その日は、それらの小石を発見した場所のことなどを話したのだから、なかなか「百選」の方へとは話が進まなかった。

その後三度ほど井上邸へと通い、七割方、「百選」の選定が済んだところで井上さんは帰らぬ人となられた。新聞社の方でも毎日新聞OBである井上靖選の『国宝百選』の完成を大いに期待していたのでかなりの痛手となった。しかし私の提案で井上さんとは公私において親しかった平山郁夫さんにバトンタッチしていただき、のちに一冊の本となった。

井上さんの通夜は風の強い寒い日だった。

私は桜町の自宅前に設けられた受付に立ち、井上さんを送る多くの人たちに接した。つぎつぎと続く通夜の客が、まるでシルクロードを埋めつくす駱駝と人が織りなす隊商のようだった。



いまでも目を閉じれば、井上さんの恥ずかしそうに微笑するお顔と少年のような好奇心に満ちた目とがはつきりと瞼の奥に浮かんでくる。多分、いまごろは良き友人であった江上波夫さんと黄泉の国のオアシスの畔で、終りの無いシルクロードの話でもしているにちがいない。

井上靖先生のこと

老呉服商の思い出

池田泰治郎（呉服池田屋）

平成十九年六月三日。私達夫婦は井上卓也さんの講演を聴聞すべく世田谷文学館へと出向いた。集まっている大勢の人々は皆、井上靖先生の熱烈な心酔者なのである。午後二時「父 井上靖を語る」と題する卓也さんの講演が始まると熱心に耳を傾け、要所要所をノートに書き留めたり、感に堪えぬというふうに肯いたりしている。

少年時代、どちらかといえば蒼白く、ひ弱な感のあった卓也さんが、今は頗も豊かに艶々としておられる。卓也さんの講演が聴けるなんて、半世紀以上も井上家に入入りさせていたでいて私にとって、夢想だにせぬ快事であった。

講演終了後、我々夫婦は深い感懐を胸に帰途につい

た。そして道すがら様々な思い出を語り合った。

「先生はどうして私達みたいな者にたびたび色々なことを話して下さったのかしら……」

「そうさな、もしかしたら愚者愛すべしと思って下さったのかも知れんよ」

家内の眩きに応えながら私は先生がお亡くなりになった夜のことを思い返していた。

平成三年一月二十九日。午後十一時半頃。

「先生が……。井上先生がお亡くなりです」

緊急の電話が出先にかかってきた。心なしか受話器から漏れる妻の声も上ずっている。昨年の暮れから先生の病状が容易ならぬものであることは承知していた。

だが、このところ小康を得ていらつしやると聞いて安堵していた。なのにこの緊急の電話である。気楽な友人達との酒興に耽っていた私は冷水を浴びせられた気がした。あとは気もそぞろであった。

だから、友人達と別れたあとの私の足は迅かった。急ぎ帰宅すると、待ち構えていた家内を逆にせきたてて運転させ、井上邸へと向かった。深更であるのに、すでに門前は報道陣で埋まり、邸内は急を聞いて駆けつけた弔問客でごった返していた。私は案内を乞うまでもなく奥の部屋へと入っていった。ここは先生が書斎として使っていたらつした和室である。御遺体は安置され、枕頭には奥様が座っていたらつしやる。やすらかに眼を瞑られた先生のお顔は普段より紅みがさし美しかった。まるで涅槃の釈迦を拝するようである。

「いいお顔をしていらつしやる」

思わず私が声になると、奥様も大きく頷かれた。「よかった」と思った。形式の時ではなく、ごく内輪の方々と共に先生のお顔を拝みながら、お訣れが出来たことは生涯の悦びであるとさえ思った。

憶い出は限らない。

昭和三十三年十二月のことである。午後五時頃、私は世田谷の新邸のリビングルームで奥様のお出ましを待っていた。

師走の日の昏れるのは早い。先ほどまで、仔犬が駆け廻っていた芝生もほの暗い。所在なげに眼を庭に向けていると、突然、斜め左うしろのドアが開いた。振り返ると先生が「アッー」と小さく声をあげて立ちつくされている。湯上りなのだろう。額には玉の汗。ラクダの上下の下着姿。ズボンとスポーツシャツは左脇に抱えていらつしやる。慌てて御挨拶申し上げようと立ち上がると、先生は「いや」と私を右手で制せられ、さっとドアを閉じられた。

そして、暫くすると身形を整えられた先生が再び静

かに入っていらつしやり、しかも「失礼致しました」と深々と頭を下げられた。

もしかして、先ほど、部屋に入りかけた先生が歩を止めずに下着姿のまま私の前を通り過ぎられたとしても、私は当然のこととして受け止めたであろう。だが先生はそうはなさらなかった。今をときめく先生が、私ごとき当時三十にも満たぬ若僧に、服装を改め、しかもとるにたらぬ非礼を懇ろに詫びられた。私は先生への敬慕をますます深めた。

昭和六十三年四月。井上邸へ参上した時のことである。持参した品々の中からお気に召したものを御買い上げたいただき、後片付けをしていた私達夫婦の前へ、一度書斎へ入られた先生が再び分厚い本を手にして出ていらつしやった。背表紙の文字が「流沙墜簡」と読める。二千五百年もの前からタクラマカンの砂漠に埋もれていた竹簡や木簡そして骨簡などの拓本が収められていると仰る。色々な手紙を説明して下さりながら「中には、九歳の女の子がエジプトにいる父親に出

してそのまま持続せずに滅びてしまったのでしょうか。あれほど強盛を誇ったローマ帝国にしてもそうですし」

私が愚問を発すると先生は、

「文明は必ず滅びます。今の文明も滅びます。ただ、今の我々にとって倖せだったのは日本の文明が他の国々より遅れて発達したことです」

と仰った。そして続けて、先年、某川の中流、某所で発見された廃墟を踏査された時のことを語って下さった。某川、某所というのは、先生は確りと仰ったのだが私はそれを聞き損ない、聞き返しては失礼に当たりはしないか、と変な遠慮をして記憶に留めなかったのである。その廃墟はおよそ四千五百年前のものであるという。街の中心に立って見ると幅十メートル程の道路が市街を縦貫し、それに約三メートル幅の横道が碁盤の目のように通っている。街角には街燈と覺しき燈台のようなものが立っている。しかし、そこが四千五百年ほど前の都市であること以外何もわかっていない。どういう人種がいつ頃から住み、いつ、どこへ行つて

した三通の竹簡があります」とその頁を開いて下さった。

「エジプトでございますか？ そんな大昔に、そんな遠くまで、その子の父親は何をしに行ったのですか？ それにしてもせっかくの手紙が砂漠に埋もれてしまうなんて……。墨も消えずに……。哀しい話でございますね」

遠い異境にいる父を想って、一所懸命、書いたであろう少女の心情を思つて申し上げると、先生も鸚鵡返しに、「哀しい話です」と仰った。

「ですが、今の墨は消えてしまっていますが、昔の墨は残つて、何かを私達に伝えようとしています」

ちようど先生が総合プロデューサーを務められた「なら・シルクロード博覧会」開幕の前で、話が古代文明について弾んでいたからであろう。二千五百年も前に、小さな女の子が文字を書き、しかもその手紙をエジプトまで送ろうとした。そのことに私は感動していた。

「それにしても、それ程に発達していた文明がどう

しまったのかわからない。

「それだけではありません」

先生は私達の顔を見比べるようにして語を継がれた。「実はその廃墟の下には更に何層もの廃墟が埋れていることがわかったのです。四千五百年前の文明ですら驚くべきことですのにその下にいくつもの廃墟があり、一番下の廃墟などはいつの時代にどんな人間が住んでいたのか、皆目わかりません。全く気の遠くなるような話です。それこそキリストも無ければ仏陀も無い。ちよつとやそつとの発掘で解明できるものではありません。一国の力だけではどうにもならないでしょう」

遠い人間の歴史を偲んで私はしばし言葉が無かった。それほどに栄華を誇った古代人はどこへ消え去ってしまったのであろう。同じ場所に何層もの廃墟が重なっていることの不思議さ。人間が同じ愚かさを繰り返すということの証左なのであろうか。

それにしてもこうした悠久の歴史を考えた時、私の存在など何と小さなものであろう。しかし小さければ

小さいなりに何とか生きていたあかしを残すことが出来ないうか。それが若い頃からの漠然とした夢であったような気がするのだが……。

平成元年九月二十二日、午後四時を少しまわる頃、私は井上邸の応接間で奥様のお手がすくのを待っていた。先刻からひっきりなしに電話がかかってくる。発刊されたばかりの先生の著書『孔子』が爆発的な人気でどここの書店でも売切れ、どうしたら手に入るかとの問い合わせばかりである。どちらの電話からでも、一刻も早く『孔子』を手にしたいたとの熱気が溢れてくる。

奥様も「手前でもでも手許になく困っております」と答えていらつしやる。すると、先生がお姿を書斎から現わされた。そして、立ち上がって御挨拶申し上げる私に「あなたの為に別にしておきました。帰りにお持ちなさい」と傍らの台の上を指さされた。

今、奥様が「手許にもない」と電話口で仰っていた『孔子』がのっている。今日、私が参上すると知って用意しておいて下さったものらしい。嬉しかった。永

い間御温情をうけ、折にふれて御著書をいただいはきたが、まさか今日、この状態の中で優先して貴重な初版をいただけるとは思ってもかけなかった。

「本当に宜しいのでございますか……」

的はずれな礼の言葉に先生は温顔をほころばせながら私の前に腰を下ろされた。

「孔子、子は先生の意。孔先生ということです。しかし、本当に孔子が存在していたかどうかかわからないのです」

「……？」

思いがけぬお言葉に私は息をつまらせる。

「もし実在していたとしても、何しろ文字の無い時代の人ですから生存していた時代が定かではありません」

それだからこそ先生は、井上靖としての「孔子」を息づかせ、小説として完成させられたのであろうか。

「二十年以上もの歳月をかけたのですから」

電話口から戻られた奥様が先生の横からこの小説の出来上がるまでの先生の御苦労について口をさしはさ

まれる。私も知っている。漏れ聞きであるから正確とは言いがたいかもしれぬが、先生が碩学の方々を招いてさまざまな古書文献を解明したり、また、中国に飛び所縁の地に立つて想を練っていらつしやったことを。そしてこの間に先生は二度にわたり大患の手術をうけていらつしやる。

最初の手術の時、先生は執刀の医師にむかい、「あと十一年の生命がほしい」と頼み、腹背からの大手術をうけられた、と聞く。それもこれも、すべて『孔子』を書き上げることに天意を感じられていらつしやったからであらうか。

「でも、これだけの苦勞を重ねたって……」

奥様が語を継がれた。

「いくら本が売れても、ほとんど税金に持っていかれ、報われることが少ないのですから」

奥様のお嘆きもよくわかる。が、先生はやりわりと「そんなことを言うもんじゃないよ」と奥様をたしなめられた。

「あくはこの『孔子』を書いている間中、楽しくつ

て楽しくて仕方なかった。難しい中国の古書を研究している時だって、苦勞だなんて思ったこともない。これほど楽しく書かせて貰った上に、読んだ方からは喜んでいただけるなんて、こんな嬉しいことはないじゃないか。そんなことを言うもんじゃないよ」

私は先生のお言葉の中に孔子を見たと思った。私は井上先生に出入りを許されてから久しい。これまでどれだけ蘊蓄のあるお話を聞かせていただき、啓蒙させられたかわからない。孔子における弟子達と異なり、先生にとって私などは路傍の石に過ぎないかも知れない。だが私にとって、折々の先生のお言葉は孔子のそれ以上であり、人生における有り難い師であると勝手に思いこんでいた。

平成二年八月某日。曇りがちの午後。井上邸へ参上した私はいつも通り内玄関から訪いを入れた。丁度、内玄関に置かれた電話の受話器を耳に当てていらつしやった奥様は黙って手にした鉛筆で応接間の方を指し示される。心得た私も無言で軽く頭を下げ室内へと入

つていく。陽は翳り、広い応接間は薄暗い。と、先生の書斎に通じる入口の柱の前に何やら蠢く影がある。先生であった。

膝を両腕の中へ抱えこみ、背を太い柱に凭せかけ坐っていらつしやる。まるで人影の途絶えた黄昏時、ビルの谷間に蹲る落魄の浮浪者の姿ながらであった。後から入ってきたお手伝いさんが点灯すると、いかにも物憂げに起ち上がり、腰をかがめ気味にノロノロと大テーブルの方へ寄つて来られる。思わず私は「大丈夫でございますか」と大声を出していた。「ウム、ウム」と二度三度頷きながら先生は庭に面した椅子に腰をかけられた。

そこへ奥様が入っていらつしやり、御自身で点てられた抹茶の茶碗を私と先生の前に直される。そして、「貴方、今、婦人画報から俵万智さんとの対談を、と言つてきましたが断りました。宜しかったですよね」

ときつぱり仰る。「ウム」と頷かれた先生は、すぐ私の方へ向き直り、

らつしやつた先生の脳裡に去来していたものは何であつたのだろう。新しい小説の構想か、はたまた御家族への思いやりや、それに繋がる生への愛着か。いずれにしても、私などが窺い知ることの出来ない深遠な洞察力で御自身の行末を見据えていらつしやつたに違いない、などと私なりの憶測をしていた。

その時の情景は先生が逝去された後も、しばしば脳裡に甦り、先生を悼む気持ちが胸を掠めた。

平成三年二月一日。密葬の日である。この日、私はかねてからの約束に従い、映画「おいしい結婚」の三田佳子さんの衣装合わせのため砧^{きぬた}の東宝撮影所におもむき、家内だけを焼香に伺わせた。心は残った。が、悔いは無かった。あの夜、間近に先生のお顔を拝み衷心から「お訣れ」をさせていただいた。手前勝手かも知れないが、今日は私の提供する和服が映画の成功の一助となるかどうかに精魂を傾ける時である。心に先生の御冥福を念じながら私はそつと訪問着の箱を開いた。

「俵万智という人はね、女性では珍しく、ぼくの作品を正確に読みこなしきちんとした話のできる人ですよ」

と仰った。

そして先生は抹茶茶碗を取り上げ私にも「どうぞ」と勧めて下さる。そして大服の抹茶を喫しながら、「ぼくの今の栄養源はこれだけなんです。食べ物が喉を通らないからエネルギーに乏しい。戦争中、フィリピンや南方の戦線の酷暑の中で、飢えた兵隊達が寒い寒いと言いながら死んでいったそうですが、よく理解できます。今、ぼくは八月だというのに毛布と厚い冬布団を二枚も掛けて寝ているんですよ」

と仰った。私もお相伴に預かり茶碗を手にしたものの、お話が胸に悶えて味が舌に沁みなかった。

先刻の先生のお姿といい、奥様が先生に相談もせず雑誌社の申し入れを断つてしまったことといい、そして只今の先生のお話といい、先生の病状は私の想像していたより遙かに悪化しておられるのであろうか。あの薄暗い部屋の片隅で柱に凭りかかり、黙想してい

これが、出入りの呉服商の心に灼きついた。井上靖先生像である。卓也さんの講演は先生に対する私の勁い思い入れを一気に吹き出させてしまった。御子息卓也さんの幼な心に映じた、時として亭主関白的な振舞いのあつた先生と、呉服商として御家庭内に入り込み、名実共に文壇の旗頭として興隆されていくお姿を眼のあたりにした私が、眩しい想いで仰ぎ見た先生とでは差異があつても不思議はない。

写真を拝見しても、旧制金澤高校（第四高等学校）の柔道部で鍛錬に明け暮れていらつしやつた頃の精悍な顔貌と、『水壁』の頃の旺盛な壮年の耀き、そして『孔子』に至る頃の円熟された温顔とでは印象が全く異なる。私に書けるのは、そのすべてである筈もない。恵まれた僅かな、しかし心に沁みる憶い出だけである。

真向法は父の免罪符

井上卓也
(井上靖・次男)

父にとって、一年で一番待ち遠しい行事は、何だったろうか。それは間違いなく、お正月であった。勿論、ほとんどの日本人にとってもそれはそうなのだが、父の場合は、その度合が特別だった気がする。クリスマスは、父にとっては、子供の行事だった。あるいは遠い異国の風習。生涯バリバリの現役有名人であった父は、お正月は、人が皆、祝賀の為に、自分に集まってくるものだと思っている。家族、親戚、仕事関係者、友人など、多い年は年賀客が百人を越えたかもしれない。あの広い応接間に座り切れず、居間までお客様で溢れかえった時もあった。

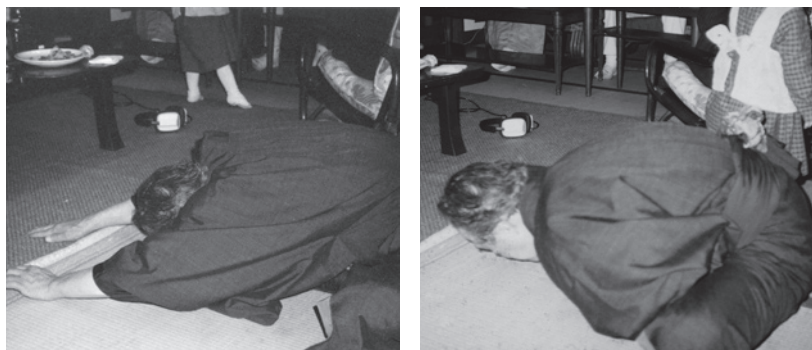
そんなお正月元旦は、父のマインドシェアでは、年に一度の「晴れの舞台」。その舞台は、酒とおせちと

歌が主役であった。酒はともかく、ノドには自慢の「歌手」たちが、日頃の酒場での修練を披露した。父も、時に興に乗ると歌ったが、それはひどく時代感覚から外れた歌唱だった。例えば旧制高校の寮歌であるとか、昭和初期に流行したと思われるような歌謡曲とか……。それもひどく調子づばずれで。

♪ 髪はミドリの少年が

今でもこんな歌が僕の耳に聞こえてくる。しかし、父は、その場では神の如き大先生。皆、静かに聞かざるを得ない。中には小声で「先生、いいかげんに他の歌はないのかね」などつぶやく番記者もいたけれど……。

しかし、父にとって、これは前座にすぎない。メイ



自宅の居間で真向法を披露する父（お正月の酒宴で）

ンイベントが待っているのである。それが、真向法（まっこうほう）という一種の柔軟体操の御披露であった。僕が今思うに、この真向法、要するにストレッチだったのだ。だけど、そんな言葉が無い頃、何かとても有難い体操に思えたことは確かだった。

酒宴もそろそろお開きになりかかる頃、父は、酔ったままヨロヨロ立上ると、

「ちょっと皆さん、そこを少し空けて下さい」

と言いながら、空いたスペースに和服姿でベタツと座り込んだ。一部の記者たちは、「そら、また始まった」と居間へ退散する。

父は何かを信仰するという事は、あまりしなかった人である。宗教は勿論イデオロギーも。しかし、この真向法にはまった。それは、この柔軟体操が自分を長生きさせてくれると信じていたからだ。いつまでも若い柔らかな肉体を維持することが出来ると。その発想の基本は、若い頃柔道の寝技で鍛えた柔軟な体があったからだ。何も真向法なんかしなくたって、父は年齢に比べて実に柔らかな肉体を持っていたのだ。事実、

父はぎっくり腰にも、背筋痛にも無縁だった。だから、こんな体操は不要だったのに、父の心の中には、大きな葛藤があった。

「これだけ大酒と大タバコを飲んでいれば、何か体に良いことをやらなければ大変な事になるぞ。何かいいものはないかな……」

そんな時、どこかの酒場で真向法を教わり「これだ、これだ」と救われたのだ。

父がバーの床に腰をつけて、ストレッチする姿が目に見えよう。真向法は、若い頃、全力投球した寝技とどこか通じるものがあったに違いない。免罪符を、ついに手に入れたのである。

「さて、見ていて下さいよ、ほら毎日、少しづつつていたお陰で、ほら体が……」

などと言いながら、父はボタンと伸ばした足に上半身をどンドン倒していく。もともと柔らかな父の上半身が、ほとんど九十パーセント近く、伸ばした足にかぶさっていく。体の硬い僕などには、とても真似できる

芸ではなかった。だいたい、父が真向法に凝りだしたのは七十歳過ぎてからの事だと思う。そんな年齢になって、父はお客様に真向法を御披露出来たのだから、大したものと言えは大したものだった。

「皆さんも、やってもらなさい、少しづつでいいんだから。毎日やれば、一ミリ二ミリとだんだんに曲がるようになりますよ」

父は御機嫌だった。お客様たちは、半分は本当に驚き、半分はうんざりしながらも、

「先生、柔らかいですねえ、いやあ、これを毎朝やってるなんて先生らしい。僕たちなんかとてもとても」

などとおだてるから、父はますます乗って、着物のはだけなど全然気にしないで、いよいよ上半身をぐいぐいとすべらせていくのだった。さあ、この写真、なんと名づけるかな……。

「井上靖、真向法で免罪符を手に入れる」とでもするか。キリスト様は信じていなかったけれど。

鳩のおしらせ②

◎文芸朗読会 井上靖「敦煌」から

主演・久米明（俳優・声優・ナレーター）

平成二十一年二月七日（土）午後三時三十分開演（開場・午後三時）

会場 小田原・鈴廣かまぼこの里 鈴の音ホール

料金 一〇〇〇円（全席自由・税込、神奈川近代文学館友の会会員は八〇〇円）

問合せ 神奈川近代文学館

☎〇四五―六二二―六六六六

◎旭川市井上靖記念館 井上靖関連行事

①文学講座 第三回

平成二十一年一月二十四日（土）

講師 北海道教育大学旭川校教授・片山晴夫氏

内容 戦後文学と井上靖

②井上靖作品の舞台を訪ねる

平成二十一年二月七日（土）

内容 企画展「井上靖の紀行文 Part 1」の解説
講師 旭川市井上靖記念館職員・中西睿氏

③井上靖・童話の世界へぬりえコンクール

平成二十年十二月～翌年一月（冬休み中）

記念館の近隣小学校二校の四年生を対象に童話（四作品）とセットのぬりえを配布し、ぬりえを募集します。審査の上、入賞者には賞状と賞品を贈呈。贈呈式では井上作品を朗読します（応募作品は記念館内に展示）。共催 井上靖ナナカマドの会

④私の好きな井上靖作品を語る会

平成二十一年一月二十五日（日）

講話 野上好氏（井上靖ナナカマドの会会員）

平成二十一年三月二十九日（日）

講話 片山礼子氏（井上靖ナナカマドの会会員・旭川大学講師）

主催 井上靖ナナカマドの会

私の 備忘録 より

平成十九年度



浦城いくよ

父井上靖が八十三歳で亡くなって七年がたちました。平成十九年は生誕百年に当たります。父の人生に関係の深かった土地や各地にある井上靖記念館で展覧会やイベントが開催され、ご相談を受けたり、お手伝いをしたりいたしました。あちこちへ遠くは中央アジアのキルギスまでも出かけて行き、行事に参加いたしました。

沢山の方々にお目にかかり、私にとりまして忙しく楽しい有意義な年でありました。これも父あつてのことと感謝しております。私の関わった井上靖関係の行事についてご報告いたします。

平成十九年

四月八日

春の名橋「日本橋」まつり。黒田秀彦、黒田佳子、夫の浦城恒雄、いくよ見学。由緒あるお江戸日本橋の真上に高速道路が通ってしまい、あたりが暗くなり、橋そのものが震んでしまった。このお

祭りは高速道路を取り払うための運動の一つでもあるそう。その催しの中で、アジアの音楽家たちがシルクロード地方の楽器で演奏する音楽と共に、私の選んだ靖の詩「四月八日」と「シルクロード」がNHKの元アナウンサー石橋健一氏により朗読された。

四月二十二日

井上靖生誕百年記念祭「お帰りなさい、先生」オープニングステージ。伊豆の天城温泉会館、十時より。井上修一、井上甫壬、その息子の井上恭一家、井上卓也、佳子、恒雄、いくよ出席。

*開会宣言、来賓祝辞、靖が湯ヶ島小学校校庭の碑に書いた詩「地球上で一番清らかな広場……」の地元小中学生による暗誦。

*映画監督・原田眞人氏による基調講演。目標は湯ヶ島で「しろばんば」の映画を撮ること、なぜ「しろばんば」

なのか、どうして井上靖なのかという想いを熱っぽく語られた。

*午後、町民劇団による「しろばんば」上演。毎年大人気で本年はさき子の死を聞いて、洪作少年が「婆ちゃんもさき子ねえさんが好きだったのか」といっておぬい婆さんと共に悲しむ感動的な場面で終わった。靖の好きだったライスカレーと塩飴のおはぎが実行委員会の方たちによって作られ、販売された。

イシククル湖の石、墓前へ

四月八日の「日本橋」まつりのイベント会場でキルギスの大統領顧問をしておられる田中哲二氏に紹介された。氏はキルギスに派遣された折、靖の「西域物語」を読み、靖がイシククル湖へ行けなかった無念さを知り、一九九三年最初にイシククル湖を訪ねた時、墓前に供えようと湖の石を数個拾って持ち帰ったので、機会があればお墓に

って供えたいと話された。生誕百年記念祭・オープニングステージの日にお墓に来ていただくことにした。

前夜からご夫妻で来られ、父が常宿にしていた白壁荘に私ども夫婦と同宿。中央アジアの話をいろいろ伺った。

当日は晴れ男の父にしてはめずらしく天気予報どおりの小雨模様であったが、昼休みの間に熊野山にある父のお墓まで登ると雨もやみ、短時間であったが薄日もさした。持参した線香、宿の主人からのお花、キルギスの帽子やイシククル湖の写真とともに湖で拾われてきた白と赤茶色の滑らかな数個の石が墓前に置かれた。田中氏は挨拶の後キルギスの曲を口琴で演奏された。二十数名が集まって行われた温かな心のこもった小さなイベントであった。

四月二十四日

小西国際交流財団日仏翻訳文学賞受賞式と懇親会。東京会館、十八時より。

修一、甫壬、いくよ出席。

渡辺守章氏が訳されたポール・クロードル「繻子の靴」が受賞した。フランス大使も出席され八十名くらいの祝賀会。渡辺氏は三か月位前から難病にかかれ、車いすで出席されたが、きれいなフランス語でお話をされた。

懇親会のお料理が大変おいしかった。

四月二十五日

十島英明氏から著書『鑑真和尚の土を踏む』をお送りいただいた。

二〇〇三年十月、前進座が大変な苦勞の末なんと三十七年ぶりに「天平の薨」の中国訪問公演を実現した。私と恒雄は上海での最終公演を見に出かけた。その時お目にかかった演出家が十島氏。公演終了後中国と日本の俳優、スタッフ、関係者の打ち上げの会に招待された。公演にまつわる珍しい話をたくさん聞くことができ楽しい食事会だった。

著書には「天平の甕」の公演にまつわる話が多く書かれていて、父やこの旅行のことなどを思い出して懐かしかった。私の写った写真が二枚も掲載されていて恥ずかしいが、とても思い出になる大事な一冊となった。

四月二十六日

碑前祭（沼津市井上靖生誕百年事業）。千本浜公園井上靖文学碑前、十時より恒雄、いくよ出席。

前日まで大雨だったが当日はまたとないような晴天となり、碑の周りの松林が陽に輝いてすがすがしい碑前祭だった。沼津市教育長や来賓、私の挨拶に続いて献花が行われた。そのあと靖作詞、団伊玖磨作曲の「沼津二章」がレコードで流され、私は初めて聞くものなので驚いた。終了後、市民が観光ボランティアの人と共に「夏草冬濤」ゆかりの場所のウォーキングに出かけた。

碑前祭知らざる人のつぎつぎに
菊そえたまひ父は幸せ

五月六日

井上靖生誕百年記念祭「お帰りなさい、先生」メインステージ。天城温泉会館。恒雄、いくよ出席。

この日はオープニングステージの日よりずっと激しい吹き降りの大雨の日だった。

*十時からモノクロ映画「しろばんば」が上映された。多くのシーンが湯ヶ島で撮影されている。当時の湯ヶ島の風景がまだまだ残っていて私にはとても懐かしい映画だった。

*午後から開会式が開かれ、実行委員長の挨拶、市長など来賓の祝辞、私も壇上で祝辞を述べさせていただいた。「本日は父の百歳の誕生日でございます。生誕百年を記念して郷里の方々にこんな盛大に祝っていただき父もさぞ喜んでいることだと思います。」

ます。有難うございました」

*「井上靖の愛した舞台―紀州、信州、そして湯ヶ島―」と題したパネルディスプレイが開かれた。司会は藤澤全氏、パネラーとして大井一郎氏（三重）、新井巳喜雄氏（長野）、勝呂奏氏（静岡）と三人の高校の先生方が靖の好んだ「熊野」「信濃」「伊豆湯ヶ島」について作品に触れながら好んだ理由を考察して述べられ、素晴らしい座談会だと思った。

*二胡と琵琶の演奏とシルクロードの詩の朗読が行われた。

大雨の中を全国から三百六十名を超える方たちが集まれ、大変盛況だった。

五月十七日～十八日

石川近代文学館の生誕百年展「井上靖と青春の地 金沢―小説「北の海」を中心に―」を見るために恒雄と久しぶりに金沢を訪れた。

「北の海」を中心に金沢に絞った展示

で、「北の海」の登場人物を個性的なイラストにしてあり、見やすく親しみやすくする工夫がこらしてあった。第四高等学校時代の三年間をすごした金沢、そこで柔道部に入学して「練習量がすべてを決定する」と柔道づけの毎日を送った日々を自伝小説「北の海」に書いている。父から聞いた金沢の話はまさに柔道に関係する友人や技の話に尽きる。生涯柔道の話をしていた。香村幸作館長にしばらくお話を伺った後、井上靖研究会会員の森井道男氏のご案内で靖が当時下宿していた家を見に行ったのは大きな収穫であった。翌十八日、森井氏運転の車で内灘町を訪問した。内灘の砂丘には私の好きな碑文「日本海美し 内灘の砂丘美し 波の音聞きて 生きる人の心美し」が彫られた文学碑がある。四高時代の三年間この砂丘を愛し、特に柔道部退部後よく来ていたのだろう。

父にとりまして伊豆湯ヶ島は八十三年の人生の基礎を作ってくれた所でした。恵まれた伊豆の自然の中に、美しさや豊かさを感じ、周囲の人々との触れ合いに温かさや喜び、時には悲しみも深く感じました。

郷里の伊豆を離れてからも、これらの感性をゆつくり大きく育て、人生の後半に作家として花を開かせることが出来たのではないかと思います。

父は湯ヶ島が大好きでした。郷里の人々と語り合うのをいつも楽しみにしておりました。父と親しかった方々は、次第にお亡くなりになりましたが、井上靖の文学を愛して下さる方々に引き継がれ、毎年父を偲ぶ催しを続けて下さっていることに深く感謝をいたしております。

本年は生誕百年ということで今までよりも素晴らしい企画をしてお世話下さった市や実行委員会の方々、本日ここにお集まりの皆様に厚くお礼を申し上げ

風強く訪ねし海の波荒く

美しき白波しばしたたずむ

何よりも私を感激させてくれたのはこの小さな内灘町の図書館で「生誕百年井上靖」という展示がしてあったことである。思いもかけないことだったので、ただただうれしかった。

五月二十日

旭川市井上靖記念館報に「生誕百年に思う―靖と旭川―」を書き上げ、投函する。

五月二十三日

熊井啓監督が亡くなられた。監督は父の小説「天平の甕」と「本覚坊遺文」の映画化の監督をされた。何度も井上宅に来られていた。父は「珍しく旧制高校生つばさが残った人だなあ」と言っていた。東京会館で行われた父の十三回忌にはとても温かいお話をしてい

ただいた。ご冥福をお祈りする。

六月五日

米子の井上靖記念館友の会会報『海鳴り』に井上靖関連の近況を書き上げて投函する。

六月十六日

ユーラシアンクラブのニュースレター『ユーラシアンホットライン』に三回の連載を頼まれた。

「井上靖生誕百年に寄せて（Ⅰ）イシクル湖の石」の原稿を書きあげ、メールで送る。

六月二十七日

クラブ関東家族定例会、十八時より。恒雄、いくよ出席。

NHKの大河ドラマ「風林火山」で主役の山本勘助を演じておられる俳優の内野聖陽氏とチーフプロデューサーの若泉久明氏によるトークショーがあり、

ドラマのエピソードなどを聞く。懇親会ではお二人と同じテーブルだった。素顔の内野氏とのざっくばらんな会話はとても興味深かった。

六月三十日

神奈川近代文学館「敦煌」朗読会、十四時より。朗読・久米明氏。恒雄、いくよ出席。

六月九日から七月二十九日まで「生誕百年記念井上靖展」。

以前に寄付した資料の中から原稿や写真、西域取材ノート、遺品などが展示された。企画展の中の行事の一つとしての朗読会である。

朗読に先立って第七章までの大まかな筋と地名の解説があり、第八章から最終章までの抜粋が朗読された。

氏のファンで満員。終了後、著書『朗読は楽しからずや』のサイン会も開かれ、私もサインをいただいた。別室にて「以前から「敦煌」を朗読したかつ

たので、自分で選びました」と話された。この何年間か朗読が盛んで、私もよくご案内いただき出かけるが、朗読の第一人者である氏は声も素晴らしく、吸い込まれるように聞き入った。

七月三日

日中国交正常化三十五周年祝賀会。ホテルニューオータニ「鳳凰の間」、十四時三十分より。いくよ出席。

詩人の陳昊蘇会長を団長とする中国人民対外友好協会代表団を歓迎するパーティー。

陳会長は北京市の副市長でもあり、昨年の日中文化交流協会五十周年の会の時にも来日され、私もご挨拶している。

七月五日

生誕百年記念祭講演会。天城温泉会館、十三時半より。恒雄、いくよ出席。静岡県立静岡がんセンター総長・山口建氏、演題「生きるということ」。

山口氏は靖のファンと自称され、高校時代帰省の途中に遠回りして金沢に行った時、小説「敦煌」を買い、列車の中で読んでファンになった話をまずされた。「生きるということ」というテーマでスライドを使って分かりやすく話をされた。生きがいは一生涯かけて求めるもの、自分でなくては見つけられないと生きる意味について語られた。

靖の最後の作品「病床日記」に触れ、病床心理や死生観についても語られた。

七月十四日～十六日

十五日、井上靖研究会。旭川市井上靖記念館で開催、十三時～十六時三十分。修一、甫壬、いくよ出席。

*開会挨拶 教育委員会生涯学習部長 顧偉良「「しろばんば」における叙情的方法をめぐって」

玉村周「井上靖と西域「敦煌」を心中として」

*講演

井上修一「井上靖の散文詩について」

*その他

曾根博義「『井上靖研究』第六号について」

*閉会挨拶 傳馬義澄

九州方面に大型台風が来ており、飛行機も欠航したりして心配していたが、旭川は快晴であった。旭山動物園の大人気と連休ということも重なり飛行機とホテルが満員で思うように取れず、来られなかった方や仕方なく日帰りされた方もいた。

当日は市役所広場に九時集合。用意されたバスにて北鎮記念館見学↓井上靖通りを歩き↓彫刻美術館↓井上靖記念館へ。その後お蕎麦屋さんでの昼食↓研究会↓親睦会。更に二班に分かれての二次会となった。

七月二十二日

『ユーラシアンホットライン』に「井

上靖生誕百年に寄せて（Ⅱ）イシクル湖への旅」の原稿を書き上げ、メールで送る。

七月二十三日

沼津市役所より三名来宅。生誕百年を記念してDVDを制作し、市内の小中学校や図書館その他の施設に配りたい。その委員会を作るので委員になって欲しいとのこと。

八月三日

沼津市DVD制作委員会。十三時より。

八月四日

後記するキルギス旅行の打ち合わせ会。キルギス大使館、十四時より。在日キルギス共和国大使館のアスカ・クタノフ大使も出席。

八月十八日

軽井沢高原文庫「生誕百年記念 高

原の薫風のなかの井上靖展」(七月二十七日〜九月二十四日)、高原サロン。修一、甫壬、恒雄、息子の浦城義明一家、いくよ出席。

近藤信行氏と大村彦次郎氏の対談「井上靖の人と文学」が十四時〜十五時三十分に開かれた。

近藤氏(元中央公論社)と大村氏(元講談社)は仕事でよく井上宅に來られていた。よく存じ上げているのでとても興味深い対談だった。

八月四日には同じ場所です川端香男里氏と井上修一の対談が行われたが、残念ながら私は出席できなかった。高原文庫の裏庭に椅子を並べ木陰での対談で、高原のさわやかな風に吹かれながら聞く気持のよい文学サロンであった。

九月七日〜十五日

キルギス旅行。

靖のソ連や中央アジアの旅行にはいつも同行され案内をして下さった国立民

族学博物館名誉教授である加藤九祚氏が名誉会長をしているユーラシアンクラブで、キルギスへの旅行が企画された。

父はキルギスのイシククル湖に行きたいと熱望したにもかかわらず、当時のソ連の事情でどうしても行くことができなかった。加藤氏によると、キルギスの首都であるフルンゼ(現在のビシユケク)に到着してからも再び旅行会社を通して申請し、予定ぎりぎりの三泊四日滞在して待ったが許可は下りなかったそうである。そのイシククル湖へ行き、詩「合流点」「新しい年の初めに」を湖畔で朗読して生誕百年の井上靖を偲ぶという旅行である。

私は父がそれほどまでに行きたかったイシククル湖とはどんな所か見てみたいと思い、恒雄と従弟の大谷光敏夫妻を誘って出かけた。加藤氏も団長として参加された。

湖の南岸のマンジュアタ村の丘の上の

ユルタ(遊牧民の移動式住居)に泊まることになった。その夜、月はなく、まさに満天の星の下でキャンプファイアを囲み、民族楽器コムの演奏、マナス叙事詩の語り、井上靖詩集の朗読、加藤氏作詞の遺跡発掘の歌、現地の人々との交流など父を偲ぶに十分すぎる素晴らしい一夜だった。

今や行こうと思えば誰でも行ける時代となったが、父はどうしても行くことが叶わず二編の詩を書き、湖にまつわる伝説を「西域物語」で紹介し、小説「聖者」の題材にもしている。この旅では参加者に散文詩を作ることが求められた。私をはじめ散文詩など作ったこともない人が大半であったが、雪の天山山脈に三万を囲まれた青い静かなイシククル湖、満天の星、非日常的な異文化の世界に触れて皆素晴らしい散文詩を書けた。父がここにいたらどんな散文詩を書いたであろうか。

旭日あび青く輝くイシククル湖

天山を背に連風の舞う

九月二十一日

堤直美氏のアトリエ訪問。十三時半より。松本亮三氏、いくよ。

静岡県長泉町では生誕百年記念に彫刻家堤直美氏にお願いして下土狩駅前しもとがりに洪作少年像の碑を作ることになった。

堤邸は井上文学館のすぐそばにあり、井上文学館館長の松本氏と訪問した。芸術家の素敵な応接間には堤氏の多数の作品が飾りかねて置かれていた。アトリエで制作中の洪作少年像を拝見する。丸顔で負けん気な少年の像が作られつつあった。その午前中に長泉町長遠藤日出夫氏に町長室でお会いする。お目にかかるのは二度目で、明るい感じの町長さんに碑のお礼を申し上げる。

九月二十三日

『ユーラシアンホットライン』に「井

上靖生誕百年に寄せて(Ⅲ)イシククル湖畔を訪ねて」の原稿を書きあげ、メールで送る。

十月二十七日

講道学舎・横地治男会長を偲ぶ会。新高輪プリンスホテル・パミール館・香雲の間、十一時三十分〜十四時。甫壬、佳子、いくよ出席。

ニコニコ笑った柔道着姿の明るい写真が飾ってあった。OBや塾生たちは、こんなニコニコしている顔はめったに見たことがなかった、塾生には本当に厳しかったと次々に挨拶された。柔ちゃんこと谷亮子選手と同じテーブルに座ったが、私にはいつもやさしかったと話されていた。

十月二十八日

『伝書鳩』原稿やつと書き上げる。

十一月二日

黒田佳子著『夜の鳥たち』出版記念会。三愛ヨコハマホテル、十七時三十分〜十九時三十分。修一、甫壬、いくよ出席。

十一月七日〜八日

旭川市井上靖記念館生誕百年記念行事、宮本輝講演会。旭川ロアジーホテル、十八時三十分より。いくよ出席。

演題「井上靖の文学」。「人生で一番つらく大変な時に「あすなろ物語」に出会い、押入れの中で読みました。自分が初めて読んだ大人の小説で、一夜にして文学青年になりました。「あすなろ物語」がなかったなら作家にはなっていないかっと思えます」と話された。靖や作品のことをあたたかく語られ、「生誕百年、今日は井上先生に恩返しにまいりました」と結ばれた。

十一月二十九日

ブルガリ銀座店のオープニングパーテ

イー。佳子、いくよ出席。

十一月二十七日、ブルガリの秘書室から電話があり、「ブルガリグループ会長のパオロ・ブルガリ氏とマイテ・ブルガリ夫人が浦城さんと黒田さんにお目にかかりたいと申しているののでぜひお越しいただきたい」と連絡があった。そのような場所にとのような服装をして伺うのですかと尋ねたらフォーマルの服装着用とのこと。華やかなブランドの開店お披露目パーティー。大勢の招待客の中で秘書室の若い女性はずぐ私たちを見つけて、店内を案内された。上の方の階で御馳走をいただいているとご夫妻が来られた。

夫人は元ジャーナリスト。きれいな知的な方だった。靖のファンで「猟銃」「わが母の記」など多数の本を読まれていて、次々と質問を受けた。「先生は戦争をどう思っておられたか」「女性の描写がとてよく書けているが女性性に対してはどうだったか」「イタリ

アでもこんな素晴らしい小説を広めていきたい」とおっしゃり、約五十分もテーブルを囲んでお話をした。

十二月二日

伊豆映像文化祭。沼津図書館四階。いくよ出席。

*井上靖生誕百年講演 山口建

*井上靖生誕百年DVD制作発表

*現代ヨーロッパのアニメの話

東海大学の高月義昭氏がヨーロッパを回ってアニメ事情を調べて来られた話をされ、とても興味深かった。

十二月十日

米子にある井上靖記念館友の会会報『海鳴り』に井上靖関連の近況を書き上げ投函する。

十二月十三日

「茶々―天涯の貴妃―」おんな映画試写会。

丸の内東映一号館、十八時五十分より。

甫壬、その娘の西村承子夫妻、卓也、その息子の井上芳良、佳子、その息子の黒田次郎夫妻、恒雄、いくよ出席。

宝塚の男役トップスター和央ようか退団後初の出演作品。主役茶々を演じている。宝塚時代多くのファンがいたスターだと聞いている。映像がとてもきれいだった。

終了後かつて父が名前を付けたという銀座の居酒屋「タマリスク」へ卓也に連れられて皆で行き、軽い夕食をする。父をよく知っているママさんのもてなしを受けた。

平成二十年

一月十四日

伝田朴也氏葬儀参列。一月六日ご逝去、八十四歳。いくよ（通夜は甫壬）出席。伝田氏は昭和五十八年〜平成七年まで芹沢・井上文学館館長をつとめられ、そのあととも友の会会長をやって下さった。東大および同大学院を卒業され、

沼津中学（靖の母校）で教鞭をとられたこともある。

「井上文学館にご縁ができてから僕の人生はすっかり変わりました。本当に良かった」とよくおっしゃっていた。毎年正月三日には文学館の職員の方たちと井上家にお年賀に来られ、父亡き後も来て下さっていた。井上文学を事あるごとに皆に語って下さった。私は伝田先生とは二度旭川へ一緒にしたことがある。

一月二十日

沼津市DVD制作委員会。十三時より。

一月二十七日

井上靖生誕百年記念祭「お帰りなさい、先生」ファイナルステージ。天城温泉会館。修一、甫壬、承子夫妻、卓也、井上弓子、恒雄、義明一家、いくよ。

*十時 熊野山墓参

*十一時〜十二時 講演会

池田香代子（ドイツ文学翻訳家）演題「文学者として 市民として」

靖の文学は視覚に訴える文章が多いということを「しろばんば」を事例として話された。

*十二時〜十二時三十分

井上靖作品読書感想文コンクール小中高最優秀作品発表と授賞式

*十二時三十分〜懇親会

生誕百年記念祭の最後の行事でもあるので、賑やかに行われ、大勢の人がマイクを持って話された。その中にウズベキスタンからの女子留学生で二十五歳のマリアさんもおられた。彼女は「西トルキスタンの旅」を訳しています」と話された。後日私宅へも来られ佳子も加わり熱心な質問を受けた。実行委員会の方たちが靖の好物だった塩飴のおはぎを手作りして売っていた。私も子供の頃からなじんでいる懐かしい伊豆の塩飴のおはぎを沢山買って帰った。

一月三十一日

昨年ブルガリ夫妻とお会いした時約束した靖の小説の翻訳本「猟銃」「闘牛」「わが母の記」などと、『伝書鳩』『井上靖研究』その他の資料をブルガリの事務所から取りに来られ、お渡しする。

二月二十一日

第十五回「井上靖文化賞」贈賞式とレセプション。山の上ホテル、十七時より。修一、甫壬、承子夫妻、卓也、佳子、恒雄、娘の砂野朋子、いくよ出席。受賞者・画家嶋田しづ氏、八十五歳。昨年の受賞者志村ふくみさん、今回の嶋田しづさんはともに八十歳代半ばの方。目的をもった生き生きとした姿を目のあたりにして、心惹かれ、感激せざるを得なかった。

二月二十八日

旭川市井上靖記念館相談役会（平成十

九年度)。クラブ関東にて、十二時より。高野昭氏、清水節男氏、荒川美智館長、いくよ出席。

旭川は大雪でまだ雪が積もっているとのこと。東京は風が強いが暖かな晴天。市も財政が厳しく、とても大変な様子。生誕百年記念事業や関連事業など、この一年間の記念館の様子などを伺い、話し合う。

三月十八日

世田谷区代田区民センター文学散歩
「しろばんばの舞台を訪ねる」。

世田谷文学館の生田美秋氏からの依頼で、私が講師としてバスに同乗して伊豆湯ヶ島へ。お引き受けした時はだいぶ前だったのですっかり忘れていたが、三月は私にとって大変な花粉症の季節だった。一所懸命説明をし、案内をしたが、お聞き苦しかったのではないかと申し訳なく思う。昭和の森会館、熊野山の墓参から始まり、「しろばん

ば」の舞台を散策する。生誕百年記念祭実行委員会の方々のお出迎えとお茶のサービス。湯ヶ島の方たちには温かいもてなしを受けた。

この文学散歩は多数の応募があり、三人に一人という抽選で当たった運のよい方が参加されたと聞く。後日参加者の感想文を見せていただいたが、大変好評だったようで私もうれしく安堵した。

三月二十六日

碑除幕式（井上靖生誕百年記念）。静岡県長泉町下土狩駅前。コミュニティながいずみ、十時より。佳子、いくよ出席。

*碑文「はじまりは出会いに他ならない」（井上靖「わが一期一会」より）

*制作・堤直美、書・岩永司明

「旭川で生まれた靖は、父隼雄の韓国派遣のため生後一年目に母八重に抱かれてこの下土狩駅で軽便鉄道に乗り換

え、両親の郷里伊豆湯ヶ島に向かいました。自伝小説「夏草冬濤」に書かれている沼津中学時代、靖は三島に住んでいた時期もあり、この辺りまで時々来ていたのではないかと思います。皆様に愛される記念碑になって欲しいと願っています」と祝辞を述べた。

晴天で洪作少年のブロンズ像がキラキラと光っていた。

幕引けば洪作少年姿見せ

若き日の父日にかがやきて

三月二十八日

沼津市DVD制作委員会。十五時半より。

出来上がったDVDを委員の方たちと見る。皆で批評し、直せる箇所は直すことになる。完成が大分遅れることになった。

（井上靖・長女）

井上靖文化賞歴代受賞者

- | | | | |
|-----|--------------------|------|------------------|
| 第一回 | 小澤征爾氏（指揮者） | 第九回 | 安田侃氏（彫刻家） |
| 第二回 | ドナルド・キーン氏（日本文学研究者） | 第十回 | 本間一夫氏と日本点字図書館 |
| 第三回 | 陳舜臣氏（作家） | 第十一回 | 直木孝次郎氏（日本古代史研究家） |
| 第四回 | 白土吾夫氏と日本中国文化交流協会 | 第十二回 | 中村稔氏（詩人・評論家・弁護士） |
| 第五回 | 梅原猛氏（哲学者） | 第十三回 | 受賞者なし |
| 第六回 | 加山又造氏（日本画家） | 第十四回 | 志村ふくみ氏（染織家） |
| 第七回 | 大野晋氏（国語学者） | 第十五回 | 嶋田しづ氏（画家） |
| 第八回 | 白川静氏（漢字学者） | | |

事業報告

井上修一（常務理事・プール学院大学学長）

平成十九年度の本財団の主な事業をご報告いたします。

（一）第十五回井上靖文化賞発表ならびに贈賞

文学、美術、歴史等の分野の専門家、作家、評論家、ジャーナリストなどの方々からご推薦いただきました贈賞対象者を、数次にわたる選考で四氏に絞り込んだ後、選考委員の先生方による最終選考会が十一月十九日に山の上ホテルで行われ、その結果、画家「嶋田しづ」氏に贈賞が決まり、直ちに報道、出版関係者に通知されました。

また、平成十九年二月二十一日には、百四十余名の方々のご参加を得て、同じ山の上ホテルにて贈賞式な

らびに祝賀会が行われました。

なお、選考委員の先生方は大岡信、菅野昭正、平山郁夫の三氏です。

（二）海外における日本文化の研究者または研究団体に対する援助

平成十八年度に豪州における日本文学の研究奨励のため「井上靖奨学金」を設立し、設立資金五十万円をシドニー大学に寄付しました。第一回の奨学金支給対象者をクインズランド大学の青山友子博士に決定し、平成十九年六月八日、国際交流基金シドニーの多目的ホールにおいてシドニー大学主催による授与式が行われました。

（三）井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

伊豆市湯ヶ島にある旧井上靖邸跡地及び跡地内の「しろばんばの碑」の管理をするともに、次のような事業を行いました。

旭川市『井上靖記念館報』第七号（平成十九年五月二十五日発行）に本財団が協賛いたしました。

米子・「アジア博物館」内「井上靖記念館」友の会会誌の『海鳴り』二十三号（平成十九年七月一日発行）、『海鳴り』二十四号（同十二月二十五日発行）に本財団が協力いたしました。

旭川市立井上靖記念館で行われた「井上靖生誕百年記念展」の、「直筆原稿『幼き日のこと』から」（平成十九年六月二日から八月二十六日まで）、「創作資料『おろしや国酔夢譚』から」（平成十九年十月十三日から平成二十年一月十四日まで）に協力いたしました。

軽井沢高原文庫で行われた「生誕百年記念 高原の薫風のなかの井上靖展」（平成十九年七月二十七日から九月二十四日まで）に出品・協力いたしました。

（四）井上靖に関する資料の収集及び調査研究

蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。特に前項（三）の事業を行うに当たって資料的側面を担当しました。

平成十九年十二月、「井上靖研究会」（國學院大學教授傳馬義澄会長）の機関誌『井上靖研究』刊行のために十萬円の助成をいたしました。

更に平成二十年三月、財団の事務所があります駒場の日本近代文学館にも、資料収集用の資金として十萬円の助成をいたしました。

また同三月、井上靖原作の「しろばんば」を上演して創立十周年になる伊豆市の市民劇団「しろばんば」に、劇の上演資金として五萬円の助成をいたしました。

（五）井上靖に関する講演などの開催

先のシドニー大学での第一回「井上靖奨学金」授与式の折、黒田佳子による井上靖の詩の朗読、井上靖原作映画「氷壁」（大映）の上映が行われました。

伊豆市では平成十九年四月二十二日から平成二十年

一月二十七日に「井上靖生誕百年祭」が井上靖生誕百年祭実行委員会（委員長・澤木育子氏）主催、伊豆市、井上靖文学館（長泉町）、本財団等の後援で行われた。講演会だけでなく、演劇、映画会、文学散歩、朗読会、資料展示、「氷壁」・ナイロンザイル事件の山への登山、シルクロード演奏会等多彩でした。主なものは、次の通りです。

平成十九年四月二十二日

講演 原田真人氏「しろばんばの世界を映画にするには」（天城温泉会館）

公演 市民劇団「しろばんば」による「しろばんば

——幼き日」（天城温泉会館）

五月六日

座談会 新井巳喜雄氏、大井一郎氏、勝呂奏氏、藤澤全氏「井上靖の愛した舞台——紀州、信州、そして湯ヶ島」（天城温泉会館）

七月五日

講演 山口建氏「生きるということ」（天城温泉会館）

平成二十年一月二十七日

墓参会（伊豆市湯ヶ島の墓地）

講演 池田香代子氏「文学者として、市民として」（天城温泉会館）

井上靖作品読書感想文コンクール最優秀賞作品の発表と表彰（天城温泉会館）

更に、生誕百年祭後の平成二十年三月九日、伊豆市の天城温泉会館にて行われた市民劇団「しろばんば」創立十周年記念公演「しろばんば——翔ぶ日」を後援いたしました。

また、前頁（三）の軽井沢高原文庫「生誕百年記念展」の関連事業として、次のような講演会が行われました。

平成十九年八月四日

川端香男里氏と井上修一による対談「普段着の井上靖」

八月十八日

近藤信行氏と大村彦次郎氏による対談「井上靖の人と文学」

旭川市立井上靖記念館生誕百年記念においても平成十九年十一月七日、宮本輝氏の講演「井上靖の文学」が行われました。

（六）その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上靖に関係するいろいろな行事のご連絡をいただきました。

○北九州市立文学館

平成十九年三月二十四日から五月六日、特別企画展「作家の自筆原稿でたどる〈文学・青春〉展」が開催され、井上靖の「闘牛」の原稿を展示。

○石川近代文学館

平成十九年四月二十一日から五月三十一日、特別展示室において生誕百年記念「井上靖と青春の地 金沢——小説『北の海』を中心に」の展示。

五月六日には恒例の「鑑真まつり」（講話・森井道男氏）、五月二十五日には朗読会「小説文学散歩 第三回 金沢を聴く——井上靖の世界」（朗読・高橋篤史氏、

演奏・寄島昭生氏、解説・森井道男氏）が行われました。

○県立神奈川近代文学館

平成十九年六月九日から七月二十九日、収蔵資料展「生誕百年記念 井上靖展」。

六月三十日には朗読会「井上靖『敦煌』から」（朗読・久米明氏、七月には井上靖原作映画「黒い潮」の上映会。

○旭川市民文化会館

平成十九年六月九日、NHK旭川放送局地上デジタル放送開局記念・井上靖生誕百年記念NHK公開セミナーで、『第一部』平成十九年大河ドラマ「風林火山」ハイビジョン上映&魅力満載！ デジタル放送紹介、『第二部』講演会「王子と孤児——井上靖と風林火山」（講師・井上修一）の開催。

九月六日、二木てるみ氏による「朗読劇『狎銃』（ドラマチック・リーディング）」の公演。

○井上靖研究会

平成十九年七月十五日、生誕百年を記念して旭川市立井上靖記念館で研究会開催、顧偉良氏、玉村周氏の

研究発表、井上修一の講演。

十二月二日、國學院大學たまキャンパスで研究会、
範麗嬌氏の研究発表、黒田佳子の講演。

○旭川市井上靖記念館

平成二十年一月十九日から三月二十三日、企画展
「井上靖の直筆色紙展——一枚に込められたその思
い」の開催。

(七) 役員

平成二十年四月一日より、これまで評議員としてご
指導いただいております角川グループホールデン
グス代表取締役会長兼CEO角川歴彦氏に理事にご就
任いただき、小学館代表取締役社長相賀昌宏氏が評議
員にご就任くださいました。

平成二十年四月一日現在、本財団の理事、評議員は
次の方々です。

理事長 井上ふみ

常務理事 井上修一

理事 浦城幾世 大岡 信 岡野光喜 角川歴彦

黒井千次 佐藤隆信 高碕芳郎 野間佐和子

平山郁夫 三木啓史 三好 徹 山口 建

監事 水谷大介

評議員 伊藤 暁 井上卓也 井上甫壬 相賀昌宏

大越幸夫 大波加弘 黒田佳子 小西龍作

篠 弘 曾根博義 高野 昭 緑川 亨

(五十音順)

なおこの事業報告作成中の平成二十年十月十二日、
本財団理事長井上ふみが亡くなりました。井上ふみの
生前には皆々様に変にお世話になりました。ここに改
めて御礼申し上げます。

井上靖文化賞に関するお知らせ

井上靖文化賞は父が亡くなりました後、故小田切進先生のご指導をい
ただき、当時の小学館社長・相賀徹夫氏の全面的なご協力を得てスタ
ートいたしました。当財団といたしましては、とりあえず十回を目処
にという計画でございましたが、幸いにも本年度十五回を迎えること
ができました。贈賞者の方々のお名前を仰ぎ見て、私どもはこの賞の
目的と使命を達成することができたと喜んでおります。そこで、この
十五回という区切りのよい年を最後に、この賞の幕を閉じることにい
たしました。

皆様方には長年に亘りご支援ご協力をいただきまして誠にありがとう
ございました。ことに、審査委員をお引き受け下さいました故司馬遼
太郎先生、故辻邦生先生、大江健三郎先生、大岡信先生、菅野昭正先
生、樋口隆康先生、平山郁夫先生にはお忙しい中にもかかわらずご尽
力を賜りまして、深く感謝いたしております。また、後援をお願いし
ておりました一ツ橋綜合財団にも心よりの御礼を申し上げます。

(常務理事 井上修一)

図書だより



平成十九年度に出された井上靖に関係する書籍、雑誌、論文などを紹介します。

【書籍】

- 秋岡康晴『旭岳の裾野にて——井上靖生誕百年に寄せて』二〇〇七年五月、グラフ旭川
- 『別冊太陽——井上靖の世界』二〇〇七年五月、平凡社
- 田村嘉勝『井上靖——人と文学』（日本の作家100人）二〇〇七年六月、勉誠出版
- 三鬼宏『井上靖の詩の世界——生誕百年記念』二〇〇七年十月、文芸社
- 結城信一『結城信一評論・随筆集成』（結城信孝編）

- 二〇〇七年十二月、未知谷
- 勝倉壽一『歴史小説の空間——鷗外小説とその流れ』（近代文学研究叢刊39）二〇〇八年三月、和泉書院
- 仙石規『時を駆けた橋——井上靖も愛した沼津御成橋の謎』（静新新書）二〇〇八年三月、静岡新聞社

【雑誌】

- 『高原文庫』二〇〇七年七月、軽井沢高原文庫
- 『井上靖研究』第六号、二〇〇七年七月、井上靖研究会

【論文・記事】

- 稲垣真美「鹿児島 井上靖『佐多岬紀行』（『国文学解釈と鑑賞』（特集『旅と文学』）二〇〇七年四月）
- 小澤保博「沖繩 井上靖『沖繩の一週間』（『国文学解釈と鑑賞』（特集『旅と文学』）二〇〇七年四月）
- 清原康正「新世紀文学館（42）井上靖生誕百年記念」（『新刊展望』二〇〇七年六月）
- 松本清治「文豪「井上靖」研究の盲点——生誕100年 矛盾はらむ生いたちにごとまで光が当てられるか？」（『月刊Lings』二〇〇七年七月）
- 梅本順子「井上靖の『おろしや国酔夢譚』——漂流民と日本語教育」（『日本比較文学会東京支部研究報告』二〇〇七年九月）
- 曾根博義「田村嘉勝著『井上靖——人と文学』（日本の作家100人）」（『芸術至上主義文芸』二〇〇七年十一月）
- 山田哲久「井上靖「玉碗記」論——考古学の引用」（『同志社国文学』二〇〇七年十二月）
- 大久保英哲「旧制高等学校のスポーツ活動研究——

- 練習日誌『南下軍』からみた四高柔道部の修道院化」（『スポーツ社会学研究』二〇〇八年）
- 趙秀娟「井上靖歴史小説における女性像」（『福井工業大学研究紀要』二〇〇八年）
- 顧偉良「井上靖「しろばんば」（『国文学 解釈と鑑賞』（特集『長編小説時の座標』）二〇〇八年二月）
- 高田宏治「監督・橋本一 原作・井上靖「茶々——天涯の貴妃」（『シナリオ』二〇〇八年二月）
- 菅聡子「「よろめき」と女性読者——丹羽文雄・舟橋聖一・井上靖の中間小説をめぐって」（『文学』（特集『戦後大衆文化と文学——昭和三〇年代をよむ』）二〇〇八年三月）
- 増田周子「宇野浩二未発表書簡五通——中野重治宛三通・井上靖宛二通」（『国文学』二〇〇八年三月）

編集後記

十月十二日に祖母井上ふみが九十八歳にて永眠いたしました。『伝書鳩』の扉にはいつも祖母の直筆を載せておりましたが、今号に書いてもらうのは厳しいようだ、と心細く思いながら編集をしている最中の不幸でした。

昨年は祖父井上靖の生誕百年にあたるため、『伝書鳩』第九号も贅沢な内容の記念号にしようと計画しておりましたが、記念号という名称ははずすことにしました。けれども内容は当初の予定通り、執筆者の方々がそれぞれに心のこもった文章をお書きくださり、このような読み応えのある号に仕上がりました。あわただしい作業日程の中、迅速に対応してくださった執筆者の方々、また的確な校正で未熟な私をサポートしてくださった小山乃り子さんに、この場を借りて御礼申し上げます。

次号は祖母の追悼の意を込めた号にするつもりです。

西村承子



伝書鳩 第9号

発行 二〇〇八年十二月二十四日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九

印刷所 (株)厚徳社

発行所 (財)井上靖記念文化財団